第15回 松本清張 Matsumoto Seicho

研究奨励事業

研究報告

松本清張『火の路』と漢魏晋以来『胡印』及び『景教印』等の研究
―印章の世界にペルシア文化とその東漸をよむ―

大阪芸術大学客員教授　久米雅雄

北九州市立
松本清張記念館

第十五回松本清張研究奨励事業

松本清張『火の路』と漢魏晋以来『胡印』及び『景教印』等の研究

―印章の世界にペルシア文化とその東漸をよむ―

大阪芸術大学客員教授　久米雅雄

目次

一、はじめに　……3
二、松本清張『火の路』の主要テーマと方法論
　及び研究奨励事業への応募　……3
三、わたくしの印章研究―「金印奴国説への反論」（一九八三）から
　「景教印研究」（二〇一三）まで―　……4
四、日本の史書に記された吐火羅人・波斯人の来朝と文物の将来・6
五、吐火羅とは、波斯とは、粟特とは何か？　……7
六、明日香の石造物の調査　……9
七、明日香の石造物等にみられる外来的要素　……12
八、漢魏晋南北朝時代の周辺民族官印「胡印」の研究　……14
《胡印の研究》　……15
　(1)　在日印章五大コレクション中の「胡印」と
　　時代順・階級別配列　……15
　(2)　在中国の「胡印」と時代順・階級別配列　……16
　(3)　在日本・在中国の「胡印」の歴史的変遷と総括　……16
九、宋元「景教印」の研究　……17
《景教印の研究》　……17
十、日本法隆寺伝来香木烙印十字の検討　……19
十一、韓国・統一新羅時代の景教もしくは基督教遺物　……21
十二、おわりに―まとめにかえて―　……21
【参考文献】　……23
【図版出典】　……25

一・はじめに

本稿は平成二十五年六月二十五日付で北九州市から決定通知書をいただき、平成二十六年六月三十日まで実施した「第十五回松本清張研究奨励事業」の人選企画「松本清張『火の路』と漢魏晋以来『胡印』及び『景教印』等の研究―印章の世界にペルシア文化とその東漸をよむ―」の実施成果である。

平成二十五年八月四日の「第十五回松本清張研究奨励事業奨励金贈呈式」のあと調査研究に着手、研究に必要な文献図書の購入や国内外での調査を実施した。松本清張氏の『火の路』の論の核ともいえる「飛鳥の石造物の調査」のために明日香村での一次調査・二次調査を実施、また新しい研究視点である「印章研究」のために九州国立博物館・福岡市博物館・寧楽美術館・岩手県立博物館などで「胡印」を調査、また中国杭州における国際印章学会で「景教印研究」（松本清張氏の『火の路』『正倉院への道』を含む）の発表もおこなってきた。

成果は「研究論文・調査報告等」のかたちで提出することになっているが、研究成果の口頭発表については、平成二十六年六月七日（土）の午後二時から「松本清張研究会　第三十回記念研究発表会」において行なった。場所は東京大学本郷キャンパス　法文二号館　第二大教室において、講演は「松本清張の昭和史」と題して作家の半藤一利氏によって、研究発表は『松本清張「火の路」とペルシア文化の飛鳥東漸―法隆寺烙印十字・明日香石造物・胡印及び景教遺物からのアプローチ―』と題して、久米雅雄により約一時間半にわたって行われた。

ここでは調査報告を含めた研究論文というかたちで成果を提出することに致したい。

二・松本清張『火の路』の主要テーマと方法論及び研究奨励事業への応募

松本清張氏の『火の路』は「古代ペルシア文化の飛鳥東漸」をテーマとした長編推理小説である。この作品は一九七三年六月～一九七四年十月までの間「火の回路」という標題で朝日新聞に連載され、一九七五年十一月に『火の路』上巻として、同年十二月に『火の路』下巻として文藝春秋から出版された。一九七六年四月～五月にかけてこの作品はＮＨＫの「シリーズ人間模様」の全七回の連続ドラマともなり好評であった。一九七八年には文春文庫『火の路』上下巻が発行され、当時、「考古学・古代史への路」を目指していたわたくし自身にとっても大きな励みを与えた。

この小説の主人公は国立Ｔ大助手の高須通子、学術雑誌『史脈』に掲載された彼女の論考「飛鳥の石造遺物」及び「飛鳥文化のイラン的要素―特に斉明紀を中心とする古代史考察と石造遺物について―」を読み、彼女を外部世界から優しく支援し教導する元Ｔ大の有望な歴史学徒であった海津信六（大阪府和泉市一条院に居住の保険の勧誘員）、彼らを通して明らかにされていく考古学や文献史学を駆使しての「ペルシア文化の飛鳥への伝来」の実相を汎アジア的なスケールで、しかも実在の学者である陳垣の「火祆教入中国考」（一九二三）、石田幹之助の「支那におけるゾラトゥーシトラ教について」（一九二八）、姚薇元の『北朝胡姓考』（一九六二）、石田茂作の『飛鳥随想』（一九六二）、門脇禎二の『新版飛鳥―その古代史と風土―』（一九七〇）などの論文や著作を用いて、論理的・実証的な方法で展開していく松本清張氏のその手法は、興味深く、また刺激的であり、同時に説得力に富んでいて無条件におもしろい。文献の選択に松本氏自身の歴史的視座の高さが現われており、そ

の学術的な複眼的思考の深さ・論理性・総合性には学会も一目置くほどだ。

いま手元に文藝春秋の文庫本『火の路』上下がある。初版は一九七八年七月発行であるが、第三刷の末尾に一九八一年九月十一日のスタンプを押してある。紙面の随処に折れがあり、付箋が張られている。あれから三十三年が経過した。

わたくし自身は一九七九年に大阪府教育委員会文化財保護課に入庁し、考古学の発掘調査・美術工芸品の指定調査・博物館の登録審査などに従事してきた。二〇〇八年以降は大阪芸術大学で日本美術史・東洋美術史・工芸特論（印章学）などを講じてきたが、『火の路』や『ペルセポリスから飛鳥へ』（一九七九）、『松本清張『火の路』誕生秘話』（二〇〇四）などを読み返し、四十年前の清張氏の『火の路』はその素描と構想と先見性において、「印章学」の見地からしても正鵠を射ていたと考えざるをえない。

今まで積み上げてきた研究成果をもとに、特にペルシア系の「胡印」や「景教印」の考古学的・歴史学的研究を通じて、松本氏が『火の路』の中で「飛鳥の石造遺物」を中心に展開された論の正当性に関する小さな一歩を進めたく、「第十五回松本清張研究奨励事業」に応募し、採択されることになった。

三、わたくしの印章研究―「金印奴国説への反論」（一九八三）から「景教印研究」（二〇一三）まで―（図1～図7）

このたび標記のテーマで研究を思い立ったのには今までの四十年余にわたる「わたくしの印章研究史」が関わっているので、本論にはいる前に少しばかりふれておきたい。

「松山で考古学を志した頃」（『明教』三三号、二〇〇三）という愛媛県立松山東高等学校の同窓会誌にも書かせていただいたように、考古学や古代史に興味を抱きはじめたのは、高校時代にイギリスのDavid Lean監督による映画「アラビアのロレンス」を観たのがきっかけであった。中野好夫氏の『アラビアのロレンス』（一九六三）を読み、彼Thomas Edward Lawrence（一八八八―一九三五）がオクスフォード大学出身の考古学者であることを知り、憧れてしまったことがきっかけである。

図1には「アラビアのロレンス」の写真、一九一一年～一九一四年頃に考古学者レオナード・ウーリィとともにカルケミッシュを発掘していた時の様子、ロレンスの師でありアシュモリアン博物館の館長でもあったD・G・ホガースによる発掘報告記事、ロレンス蒐集のヒッタイトの印章、一九三五年のオートバイ事故直前の写真、そしてロレンスを演じたPeter O'toole氏にファンレターを書き、一九六六年二月二十三日付けで署名入りブロマイドを同封して頂いたお返事などを掲載している。「ヒッタイトの印璽を蒐集する青年考古学者」「印章研究のパイオニア」としてのT・E・ロレンスが、この時すでにわたくしの脳裏に刷り込まれたようだ。

一九六六年春に「在野史学の雄」といわれた北山茂夫、林屋辰三郎、奈良本辰也教授らのおられる立命館大学文学部史学科（日本史学専攻）に進学した。考古学・古代史学を専攻したが、考古学の講義のなかで、一九五三年に第二十八回芥川賞をとられた松本清張氏が筆を執り、一九五四年の『別冊文藝春秋』第四十三号に掲載された「風雪断碑」（現名『断碑』）という若き考古学者（森本六爾をモデルとする）夫婦の生涯を描いた作品を読むようにと勧められたのを思い出す。文献史学と考古学を併行して学び、北山茂夫先生のゼミでは「金印奴国説への反論」（金印＝伊都国説）を発表、卒業論文は「二世紀末葉における倭国動乱の歴史的意義」を提出、学園紛争の中、奈良女子大学の門脇禎

二先生に見ていただいた。

図2は一九八三年に発表された「金印奴国説への反論」（一九六八年に北山ゼミで発表）の論拠を整理したものであり、中国語方言論（漢音呉音の並存）・印制（侯候区別）・弥生王墓の分布（糸島に集中）・魏志倭人伝の記事（伊都に王あり）などを総合的に判断して「委奴＝伊都」国説を提唱した。

図3は一九八六年に北山茂夫先生の追悼論集の中で「新邪馬台国論」（一九七〇年に卒業論文として提出）として発表したもので、従来、同一視されてきた女王国と邪馬台国とを互いに異なる「筑紫女王国」と「畿内邪馬台国」との二国にわけてとらえ、二世紀後半の「倭国大乱」は女王の鬼道による東征戦争であり、結果樹立されたのが副都畿内邪馬台国であり、大乱終結後の筑紫女王国と畿内邪馬台国の二王朝並立論を唱えた。

図4は女王卑弥呼の時代の「魏志倭人伝」に記された金印「親魏倭王」印、銀印「率善中郎将」「率善校尉」印を印文の完全形で復元する試みである。或る『考古学事典』が記す「魏倭率善中郎将」「魏倭率善校尉」の印文は誤りであり、正しくは「魏率善倭中郎将」「魏率善倭校尉」でなければならぬことを指摘した。そのことは下段の「魏晋の銅印」をみてもわかるように「魏」は大国（蜀・呉頒給の蛮夷印は未発見）であり、周辺民族への印章は烏丸・屠各、高句麗・扶余・匈奴・支胡など民族名・国名が二文字、三文字以上の場合と氐・羌、韓・貊など一文字の場合とでは「率善」なる修飾語の入る位置は異なる通則による。「親魏倭王」の倭の場合「率善」は倭の前に入る筈である。

これらの論稿のあと印章研究の領域をさらに拡げ「大坂城跡出土の円形印章〔ローマ字印〕について」（一九九七）、「日本古代印研究」（一九九九）、「日本国王之印研究」（二〇〇〇）、「倭の五王と将軍章」（二〇〇一）などの論稿を通史的に仕上げ、同年に学位論文「日本印章史の研究」で博士号〔文学〕を取得した。その後も「駝鈕銀印『晋率善羌中郎将』印とその史的周辺」（二〇〇二）、「シルクロードの印章」（二〇〇二）、「東西印章史論序説―中国・シルクロード・オリエント―」（二〇〇三）などと研究を深めてきた。二〇〇三年以降の論文の入選以降、中国の印章学会やマラヤ大学・フランス極東学院からも招かれるようになり、今日に至っている。

図5は「シルクロードの印章」を考察しようとしたもので、特に「探検史」のいくつかに注目している。「絹の道」の命名者はドイツのリヒトホーフェン（一八三三―一九〇五）であるが、当初考えられていた「中国とソグディアナと西北インドを結ぶ道」という概念は大きく変容し、ヘルマンの時代以降「中国からローマへの絹の道」と認識されている。スウェーデンのヘディン（一八六五―一九五二）による楼蘭古址の発見、イギリスのスタイン（一八六二―一九四三）による敦煌及び尼雅（ニヤ）古城址の調査、大谷光瑞（一八七六―一九四八）による西域探検、そして楼蘭や敦煌での「封検」の発見などがよく知られており、私も敦煌・難兜など西域地名を伴う印章を調査した。

図6は「印章」のいくつかをまとめたものである。大谷探検隊による『西域考古図譜』（一九一五）にはトングスワミヤの獣鈕印、クムトラの指輪形肖形図像印、『新西域記』（一九三七）にも「朱中卿」「護封」の印、その他シリア文字やウィグル文字の印章なども紹介されている。ここに挙げているのは尼雅遺跡出土の「鄯善都尉」封泥、インド系の「カローシュティ木簡と封泥」、敦煌の亀鈕銅印「文徳左千人」「敦徳歩廣曲候」などである。清張氏の『火の路』との関連で注意がひかれるのは西域北道に位置するクチャ出土のインド象、西域南道に位置するヨトカン出土の天馬（ペガサス）の印章などである。

最後にもうひとつ紹介しておきたい印章研究の成果は二〇一三年に日本及び中国で発表した「景教印研究」である。上海博物館の孫慰祖氏が二〇一〇年に

『中国印章―歴史與芸術―』という優れた論考の中で「景教印」を一顆紹介されていたのに端を発し未開拓である「景教印」の分類や編年研究を試みた。楊廣泰編選の『宋元古印輯存』の資料全体を一度解体し、その上で鈕制・形制・意匠によって「十字架形遺物」を三種に分類する試みを行なったのである。大きく①景教印、②基督教別派の印、③ゾロアスター教、マニ教、ラマ教などその他宗教との融合印に分類しているが、それを示したのが図7である。この景教印研究については本論中で扱うのでここではこれ以上の言及は行わない。

四．日本の史書に記された吐火羅人・波斯人の来朝と文物の将来（図8～11）

日本の飛鳥時代に西域の吐火羅（トカラ）人や波斯（ペルシア）人が来朝していたことは明白な史実である。すなわち『日本書紀』には孝徳天皇の「白雉五年（六五四）夏四月、吐火羅国男二人、女二人、舎衛女一人、被風流来于日向」、斉明天皇の「三年（六五七）秋七月丁亥朔己丑、覩貨邏国男二人女四人、漂泊于筑紫。言、臣等初漂泊于海見嶋。乃以驛召。辛丑、作須弥山像於飛鳥寺西。且設盂蘭盆会。暮饗覩貨邏人」「五年（六五九）三月丁亥、吐火羅人共妻舎衛夫人来」、「六年（六六〇）秋七月、又覩貨羅人乾豆波斯達阿欲帰本土、求請送使曰、願後朝于大国、所以、留妻為表。乃与数十人、入于西海之路」と記されており、また『続日本紀』の聖武天皇紀には「天平八年（七三六）八月庚午。入唐副使従五位上中臣朝臣名代等率唐人三人波斯人一人拝朝」「十一月戊寅。天皇臨朝。詔授入唐副使従五位上中臣朝臣名代従四位下。唐人皇甫東朝。波斯人李密翳等授位有差」の記事を見出すことができる。このように「史書」には七～八世紀において吐火羅（覩貨羅）人・波斯人が来朝していたことを記している。

それでは西域文物の日本将来についてはどうか？日本の六世紀の古墳である大阪の伝安閑天皇陵から波斯系の「切子碗」が出土している。同じく六世紀の古墳である奈良の新沢千塚一二六号墳からも波斯系の「小形切子装飾瑠璃碗」などが出土している。これらの事実から、遅くとも六世紀代には日本と波斯との間に直接・間接の交流が成立していたことは確かな事実であると認識できる。

ここでは特に七世紀以降の西域文化将来の証拠について図を用いて説明してまいりたい。

図8は奈良に所在する法隆寺関連の文物である。左上に示しているのは日本独特の弧鈕無孔の「法隆寺印」である。法隆寺献納宝物の一で銅製で印面の縦横は方六・〇cm、総高は七・三cm、周縁は欠損しているが、印文の鋳出は深く〇・七cmを測る。蝋型鋳造法（失蝋法）で制作されており、白鳳時代、七世紀の印章であると判断される。東京国立博物館にある。この「法隆寺印」については人間国宝（重要無形文化財）香取正彦氏による摹古印がある。

なお日本の古代律令国家形成過程の印章の公式記録については『日本書紀』持統天皇六年（六九二）九月丙午の条「神祇官奏上神宝書四巻、鑰九個、木印一個」、『扶桑略記』の大宝二年（七〇二）二月乙丑「諸国司等始賜印鑰」、『続日本紀』の慶雲元年（七〇四）四月甲子の「令鍛冶司鋳諸国印」、同書養老三年（七一九）十二月乙酉の条「充式部、治部、民部、兵部、刑部、大蔵、宮内、春宮印各一面」、同書宝亀二年（七七一）八月己卯の条「初令所司鋳僧綱、及大安、薬師、東大、興福、新薬、元興、法隆、弘福、四天王、崇福、法華、西隆等寺印、各頒本寺」などの記事がある。

図8の「天皇御璽」「御水瓶」「七曜之御劔」などは天保十三年（一八四二）

に刊行された『御宝物図絵』（南都法隆学問寺）に登載されている。これらのうち「推古帝ノ御所ニテ常ニ用ヒ玉フ」御水瓶は胴部に天馬（有翼馬）の意匠を有しており、明らかにギリシア的要素を伴うペルシア系の文物である。

図9の左上は奈良正倉院の「白瑠璃碗」「漆胡瓶」「螺鈿紫檀五弦琵琶」である。これらがペルシア系の文物であることはすでにふれたとおりである。

図9の他の二点は法隆寺の献納宝物である。「龍首水瓶」は全高四九・九cm、胴径一八・九cmを測る銅製鍍金・鍍銀の器物である。白鳳時代、七世紀のもので、胴部の天馬（ペガサス）の出来栄えは秀逸である。東京国立博物館に所在する。

もうひとつの「四騎獅子狩文錦」は絹製で縦二五〇・〇cm、横一三四・五cmを測る。七～八世紀にかけての唐時代のペルシア系文物である。馬上から振り向きざまに獅子を狩るパルティアン・ショット射法を用いる勇猛果敢な武人の姿と天馬（ペガサス）の像に注目しておきたい。

図10は法隆寺献納宝物の「伎楽面」である。伎楽は推古天皇二十年（六一二）に「百済人味摩之帰化。曰、学于呉、得伎楽儛」とあるように味摩之が将来した舞楽とされているが、左列二面が「酔胡王」、右列二面が「酔胡従」の面である。左上の「酔胡王」は木造彩色で縦四二・八cm、横二四・五cmを測る白鳳～奈良時代の八世紀のもの、左下が同じく木造彩色で縦三二・六cm、横一九・八cmを測る白鳳時代の七世紀のもの、右上の「酔胡従」は木造彩色、縦三〇・〇cm、横二三・〇cmを測る白鳳時代七世紀のもの、右下は木造彩色、縦二九・六cm、横二二・八cm、白鳳～奈良時代にかけての八世紀の「伎楽面」と考えられている。いずれも東京国立博物館に所在する（大阪外国語大学の井本英一氏は『古代の日本とイラン』（一九八〇）の中で「味摩之とはミツル・マルチークというイラン人名である」とされている）。

図11は「法隆寺伝来香木」二点である。いずれも白檀材である。

梅檀香（N一一二）は長六六・四cm、最大径一三・〇cmを測り、墨書に「天応二年」（七八二）、「延暦二十年」（八〇一）、刻書に「bwhtw [d] y」（原文パフラヴィー文字）、焼印に「syrnym」（原文ソグド文字）が認められる。もうひとつの白檀香（N一一三）は長六〇・三cm、最大径九・〇cmを測り、「字五年」（天平宝字五年＝七六一）、「天応□年」（七八二？）、「延暦二十年」（八〇一）などの墨書をもち、同文の刻書及び焼印をもつ。

ここでは香木の刻文が「パフラヴィー文字」であり、焼印の印文は「ソグド文字」であるとの指摘から、奈良時代の八世紀中葉頃にパフラヴィー文字及びソグド文字の焼印を伴うペルシア系文物が日本に到来していたことを示す資料として貴重であると述べることができる。東京国立博物館にて保管されている。

以上、日本の官修正史である『日本書紀』や『続日本紀』の文献史料のなかに、吐火羅人や波斯人の来朝のことが記されており、文物としてはさらにそれよりも古い時代のものを含む六世紀の古墳から出土した「切子碗」「小形切子装飾瑠璃碗」、正倉院の「白瑠璃碗」「漆胡瓶」、法隆寺献納宝物としての「龍首水瓶」「四騎獅子狩文錦」「酔胡王」「酔胡従」の伎楽面、刻書及び烙印十字を伴う「香木」などを確認することができた。とは言え、吐火羅（トカラ）とは何か、「波斯」（ペルシア）とは何か、粟特（ソグド）とは何か？と問われた場合に、答えが明瞭になっているわけではない。地図を見ながら考えておこう。

五．吐火羅とは、波斯とは、粟特とは何か？

（図12）

『日本書紀』『続日本紀』や香木に登場の「吐火羅」「波斯」「粟特」とは何か。

歴史教育研究所編の『世界史事典』（一九七八）により基本点をまとめておこう。

「吐火羅」（Tokhara）については「アラル海にそそぐアム川上流、ヒンズークシ山脈の北側の地方」「古来、東トルキスタンと西アジアを結ぶ要地。アケメネス朝ペルシア、アレクサンドロス大王の支配ののち、バクトリア（古代ギリシア人が建てた王国で、東トルキスタンからペルシア・インドへの要地）が現れ、さらに前二世紀にはトハラ族の国家が成立した。中国では大夏と呼ばれ、のち大月氏（イラン系遊牧民でソグド地方に建国）に属したが、やがてそこからクシャン朝（イラン系民族が建国、中国では貴霜という）が発祥した」と説明されている。基本的にはイラン系であるが、ギリシア的要素も垣間見える。

「波斯」（Persia）についてはどうか。「前五五〇年頃にアケメネス朝ペルシアが成立、キュロス大王やダリウスⅠ世、アルタクセルクセスⅠ世等を経て、前三三一年にアレクサンドロス大王はペルシアのダリウスⅢ世を滅ぼす。アレクサンドロスが倒れたのちは（シリアの）セレウコス朝が支配するが、前二五〇年ごろにはパルチアが成立、後二二六年にササン朝のアルダシールⅠ世がイラン民族の国家を再興し、ゾロアスター教を国教として独自の文化を発展させた。ヤズドガルドⅢ世の六四二年以後はイスラム帝国の支配下に入り、イスラム化した」とまとめることができる。ペルシア、ギリシア、シリア、七世紀以降はイスラムとの融合も想定される。

「粟特」すなわち「ソグド人」（Sogdians）についてはどうか？

「中央アジアのサマルカンド付近のイラン系住民。シルクロードの東西貿易に活躍し、唐代の中国の記録には、『五歳で読み書きを習い、二十歳で隊商に加わって遠国へ行き、経験を積む』といったうわさが記されている。南北朝から唐代の中国では『胡人』と呼ばれた」「古くから諸民族の争奪の地で、中国では漢代から粟特の名で知られた。多くのオアシス都市国家が発展し、イラン系原住民のソグド人は東西貿易に従事、東西交渉に重要な役割を果たした。中国では南北朝以後、彼らを『胡人』と呼んだ」と記されている。

最近の研究では吉田豊氏の「ソグド人とソグドの歴史」（『ソグド人の美術と言語』、臨川書店、二〇一一年）によれば、「ソグドは現在のウズベキスタンやタジキスタンの地域である」とされ、「胡」とは「イラン系でも中央アジアのソグド人を指すとみなすべきである」としている。

では実際にこの地域を地図で探してみよう。

図12の「西域要図」が示すように、吐火羅や大夏や粟特の地は、敦煌、楼蘭より更に西方、天山北路、天山南路（西域北道）、西域南道を経て（天山山脈、タクラマカン沙漠との関連でいえばトゥルファン・クルジャ・トクマク・タラス、クチャ（亀茲）・キジル・アクス・カシュガル（疏勒）、ニヤ（尼雅）・ホータン（于闐）・ヨトカン・ヤルカンドなどが有名）、フェルガナを越え、パミール（葱嶺）を越え、あるいは崑崙を越え、アライ山脈、ヒンズークシ山脈などの隘路を抜け出て、更に西方にみいだす土地のことである。ペルシアはさらにその西方にある。

『日本書紀』や『続日本紀』の記述によれば、この地域のトカラ人やペルシア人が飛鳥・奈良時代に来日したということであり、西域系の古墳出土品や正倉院や法隆寺への将来品はこのことを裏づけているというわけである。人間の驚くべき偉業と感服する。

松本清張氏の場合、これらの要素に「飛鳥の石造遺物」を考察の対象に加え、また根拠にして、「ゾロアスター教（拝火教）の路」である『火の路』（一九七五）や『ペルセポリスから飛鳥へ』（一九七九）の構想を練り、また発展させられたのである。「明日香の石造遺物」は重要な要素であるのでこの点にも眼を注いでおく。

六．明日香の石造物の調査

（図13～19）

二〇一三年十一月二十二日及び十二月二十三日の二度にわたって明日香の石造物の調査を実施した。十一月二十二日の第一次調査では橿原神宮前駅で降りて孝元天皇陵の傍を豊浦寺（向原寺）跡、甘樫丘、水落遺跡、石神遺跡、飛鳥寺を経て、飛鳥資料館まで足をのばした。途中、埋蔵文化財室にも立ち寄ったが、前日に一時的に移設されてきたばかりの宮内庁の型取による「飛鳥石造物」のレプリカに巡り合えたのは幸運であった。十二月の第二次調査では飛鳥駅で下車、鬼の雪隠・俎から始め、天武・持統合葬陵、聖徳中学を経て、亀石、川原寺（弘福寺）、橘寺の二面石、石舞台古墳、酒船石、亀形石槽、小判形石槽、欽明天皇陵、吉備姫王墓の猿石などをみてまわった。二日間とも良き天候に恵まれ、予期せぬ発見や発想もあり、喜ばしい意義深い調査となった。

まず明日香の石造物の概要から見ておこう。

図13は飛鳥の宮跡・寺院址・陵墓・石造物などの所在を示した地図と飛鳥の石造物への関心を示す古絵図をいくつか示したものである。飛鳥資料館の『飛鳥の石造物』（一九八六）や「あすかの石造物」（二〇〇〇）によれば、藤貞幹の『好古日録』（一七九五）に記された「猿石」、『梅山塚古図』に描かれた「欽明天皇陵と猿石」、『大和名所図会』の「亀石、鬼の厠」、『西国三十三所名所図会』の「益田岩船」及び「酒船石」などが描かれている。本居宣長の『須我笠能日記（菅笠日記）』（一七七二）には「酒船石」について、荒木田久老の「大和河内旅路の記」（一七八二）には「石にて彫たる人」への言及があり、「男・女・法師・猿」などと呼んでいる。そのほか上田秋成の『岩橋の記』（一七八八）には「酒槽」、木内石亭の『雲根志』（一八〇一）には「子をいだきたるあり」「石像七躰」（猿石）への言及などがある。

図14は石人像と呼ばれる石造男女像、須弥山石、酒船石、亀形石槽である。石造男女像は明治三十六年（一九〇三）に奈良県明日香村飛鳥の石神遺跡から出土したものである。異国風の老年の男女が前後に寄り添って彫刻されている像である。男性は大きな杯を持っていたようであるが、飛鳥資料館の真品が示すように現在は欠損しており、導水孔の破断面が見える状態である。高さ一・七m、幅約〇・七mを測り、男女の口元にはそれぞれ直径二cmほどの円孔が開けられており、口から水が噴き出す構造である。

須弥山石も同じく石神遺跡からの出土であるが、明治三十五年（一九〇二）の発見である。高さは約二・三mで中空である。上段に仏教世界の中心となる須弥山、中段にこれを取り巻く山脈、下段には水波文が彫刻されている。下段には四方に直径五mmほどの小孔が開けられていて木樋を通じて水槽に溜まった水が写真のように四方に噴き出す仕組みになっている噴水施設である。解説によれば「この四つの噴き出し口は、世界を取り巻く大海に注ぐ四つの大河を表わしたものであろう」とされている。斉明天皇紀三年（六五七）の飛鳥寺西の「須弥山像」などが思い出され興味深い。

酒船石は東西五・五m、南北一・三m、厚さ約一mの巨石であり、平坦な面に隅丸半楕円・隅丸方形・円形の窪みが直線溝で結ばれている。西端には長さ八〇cm、幅四〇cmの枕石あるが、大正八年（一九一九）の調査のおりには枕石は粘土で固定されていたとのことである。用途についてはゾロアスター教の拝火壇説、祭祀のための導水施設、庭園の流水施設、酒などの醸造施設などの諸説がある。清張氏は『火の路』の中で「胡天神（アフラ・マズダ）に供えるハオマ酒の製造用であったかも知れぬ」とされている。私見については後程のべることにする。

亀形石槽は二〇〇〇年正月に小判形石槽とともに、斉明天皇の「両槻宮」と

想定されている酒船石遺跡から出土した。花崗岩製で全長約二・四m、幅約二mの大きさで、中央に円形の甲羅形の刳りこみがある。直径一・二五m、深さ約二〇cmを測り、水槽状を呈する。顔は南側にある「小判形石造物」（長さ一・六五m、幅一・〇m、水槽状の部分の長さは九三cm、幅六〇cm、深さ二〇cm）に向け、尻尾は北に向けて、下り斜面の排水溝へと繋がっている。詳細は『新出土　亀形石造物遺構』（二〇〇〇）を参照されたい。用途は水神に関わる神事、禊のための施設と考えられている。

図15は猿石、人面石、二面石、立石、マラ石、出水の酒船石である。

猿石は通常、吉備姫王の墓と一体関係にあると思われがちであるがそうではない。元禄十五年（一七〇二）の秋に「梅山塚」（後に欽明天皇陵に治定）の南にある字池田の田圃から「猿石」四体が発見され、それらが梅山塚の前方部に並べられ、明治の初めころに斉明天皇の母である「吉備姫王」の墓前に移されたものとされている。山王権現、女、法師、男などから成る。

上段左上の「山王権現」は高さ一二八cm、最大幅一〇一cm、最大厚八四cmの正坐する二面石で、前面は被り物をし両手を腹前に置き陽物を出す男性、背面は大きな耳のうしろに「角とタテガミ状の耳髪がある」生き物とされている。実際にみたところ「タテガミ状の耳髪」は「翼」の表現のようにも見える。

「山王権限」の奥の「女」はナデ肩の彫像で高さ一〇〇cm、幅六五cm、厚さ一〇〇cmを測る。胸前に乳房を思わせる下向の円弧文が浮彫浮されていることにより女性とされてきた。

その下の「法師（僧）」は高さ一〇六cm、幅七九cm、厚さ七四cmを測る立膝の像である。頭の生え際には沈線の輪郭がつけられているが毛髪表現がないので「法師（僧）」と呼ばれてきた。外来系であれば「伝道師」と呼んでよいのかも知れない。

その奥の「男」は高さ九九cm、最大幅九〇cm、最大厚さ五八cmを測る。ユーモラスな表情をしており、頭部は烏帽子をかぶっているように見える。お尻を地に着けて坐る男性裸像である。

次に上段中央の「人面石（顔石）」に移る。これは昭和五十三年（一九七八）に高取の光永寺で発見された。高さ一〇三cm、幅八〇cm、厚さ一一〇cmを測る。風貌に中央アジア～東南アジアにかけての雰囲気を看取することができる。

その右隣は同じく「高取の猿石」である。高さ八五cm、幅七三cm、厚さ六八cmを測る。恐らく高取城築城の際にこの地に運ばれたものと考えられる。

その下は「橘寺の二面石」である。橘寺本堂脇に置かれてある二つの顔をもった石造物である。高さ一・二四m、下幅一・二一m、奥行〇・五mを測る。それぞれの顔を「善面」「悪面」と呼んでいる。後方は切断面で彫りが無い。

次に本図下段左下に「立石」を五つ挙げる。

左端の「上居の立石」は昭和四八年（一九七三）に発掘、高さ一・九m、幅一・七m、奥行は下方が一m、上方が〇・三mほどである。

右隣の「川原の立石」は高さ一・五五m、幅〇・七m、川原寺の東の境にある。

さらに右隣の「飛鳥の立石（ミロク石）」は高さ二m、幅一m、奥行は下部で〇・八mである。正面からみると地蔵菩薩のようなので「ミロク石」とも呼ばれている。川原寺の東北に位置している。

左下の「祝戸の立石（マラ石）」は現状の高さが一・二五m、幅は六五cmの四角い柱状を呈しているが、先端部には丸みがある。『西国三十三所名所図会』には「陽石」とあり、石田茂作氏は『飛鳥時代寺院址の研究』（一九七七復刻）で「マラ石」と名付けている。子孫繁栄、豊穣を祈願する農耕信仰に関係した遺物ともされる。

その右隣の「岡の立石」は高さ二・五m、幅一m、奥行二・五mを測る。岡寺

の西に位置している。これらは境界石と考えられている。

本図最後は下段右下の「出水酒船石」である。

ここには大正五年（一九一六）の写真を掲載している。滑り台のような傾斜のある石は長さ三・二m、幅〇・五mを測り、内部に幅〇・一m、深さ〇・二mの溝が穿たれている。もうひとつの石は長辺四・三m、短辺三・二mを測り、西洋梨を半截したような形をしており、棗形の大きな窪みと約〇・一mほどの溝をもっている。導水施設と考えられている。

図16をみていただきたい。ここにはまず左上に亀石を載せてある。亀石は明日香村川原に所在し、長辺四・五三m、短辺二・七七m、高さ二・一m以上を測る。早くは永久四年（一一一六）の「弘福寺僧彦印解」に領畠「字亀石境内」の記述が見える。

昭和三十二年から三十四年（一九五七―一九五九）にかけて川原寺の発掘調査が実施された。一九六〇年に発行された奈良国立文化財研究所による学報第九冊『弘福寺　川原寺発掘調査報告』によれば「亀石」は寺域資料として採りあげられている。

川原寺は飛鳥寺（元興寺）・薬師寺・大官大寺（大安寺）と並ぶ飛鳥の四大寺のひとつに数えあげられている。『日本書紀』にはこの寺の創建に関する記述がなく（六七〇年頃、天智天皇による開基か）、また平城京遷都の際にも他の飛鳥寺・薬師寺・大官大寺のようにその本拠を平城京へ移さず、延久二年（一〇七〇）、建久二年（一一九一）の焼失の頃まで飛鳥の地にとどまった「謎の大寺」とされている。

わたくし自身は川原寺を二〇一三年十二月二十三日に訪れた。当初予定には入っていなかったのだが、橘寺の二面石の調査の前に、ふと道を隔ててその北側に隣接する復元整備された「川原寺」に立ち寄ってみたのである。学生時代に奈良国立文化財研究所の町田章文部技官による「伊予国分寺址の発掘調査」などに参加して国分寺レヴェルでの礎石というものを見てはいたが、何よりも驚いたのは川原寺の礎石の形の多様性と十字や星印のような今まで見たことのないような意匠を有つ礎石群をみたということである。図16には『弘福寺　川原寺発掘調査報告』（一九六〇）から「塔及び東回廊」「回廊西北隅」「西僧房」の実測図などを掲げているが、まずは十字礎石の並びに注意をはらっておきたい。石田茂作氏の大著『飛鳥時代寺院址の研究』（一九七七）で同種類の礎石を探してみたがひとつも見出すことは出来なかった。

網干善教氏は『謎の大寺　飛鳥川原寺』（一九八二）の中で興味深い指摘をされている。「川原寺の歴史を調べてみると、この寺が他の飛鳥の大寺に較べて、とりわけ外国との関係の深い寺院であったことがわかる。たとえば伎楽団である。『日本書紀』には、川原寺に当時日本では唯一の伎楽団が置かれていたと記されている。伎楽は呉楽ともいう古代の外来芸能である。西域からシルクロードを経て伝えられた仮面劇、伎楽。東大寺の正倉院に保存されている伎楽面にはギリシャ文化の影響さえ見られるという。迦楼羅、婆羅門、酔胡王などの表情は、確かに日本文化とは異質である。しかもそれぞれの仮面は西域の古い伝承や神話と深く結びついている。例えば迦楼羅はインド神話に登場するガルダ鳥のことである。ヴィナータの息子として生まれ、母を救うために神々と戦い、ついに甘露を手に入れて母親を喜ばせる聖鳥である。インド、西域の仮面劇は、当時の飛鳥の人々には極めて異国的なものであった。その伎楽団がなぜか川原寺に置かれていたのである」。

図17は同じく川原寺の「礎石集成」の写真二種と「薬師寺十字廊の発掘調査」に関する二〇一四年の奈良文化財研究所による資料及び『薬師寺縁起』の記述である。そこには「東西十四丈一尺　南北五丈六尺　高さ九尺二寸　食殿と云

ふ」「右は天禄四年（九七三）二月二十七日に焼亡す」と記されてあり、特に薬師寺伽藍配置図北端のその十字形のプランは興味深い。この点についての予察と私見についてはのちほど述べる。

二〇〇一年三月に明日香村大字阿部山に所在するキトラ古墳にデジタルカメラを挿入しての第三次石槨内探査が実施されて石槨の南壁内側に鮮やかな赤色で描かれた四神のうちの朱雀図が発見確認された。その速報は『新改訂キトラ古墳と壁画』（二〇〇六）に良くまとめられている。

図18は高松塚、キトラ古墳、薬師寺本尊台座、正倉院十二支八卦背円鏡の中にみとめられる四玄武と薬師寺本尊台座の朱雀である。亀と蛇の絡まる玄武の意味、朱雀の顔が鳩に見えるその意味は何か。その有効な方法を思案する。

石造物ではないが、無文銀銭・富本銭などの貨幣にも注意を払っておきたい。図19は上段に大阪府の真宝院、滋賀県崇福寺から発見された「無文銀銭」、下段に奈良県の飛鳥池遺跡、藤原京、平城京等から出土した「富本銭」を掲載している。いずれも和銅元年（七〇八）発行の「和同開珎」以前の貨幣である。

大阪府真宝院の無文銀銭は宝暦十一年（一七六一）に約一〇〇枚近く出土したが、そのうちの一枚がこの銀銭である。無文であると言いながら十字の刻印が観察される。昭和十四年（一九三九）に滋賀県崇福寺の塔跡から出土した無文銀銭の中にもクロス形・T字形の意匠を観察できるものがある。奈良県の飛鳥京跡、川原寺跡、石神遺跡、藤原京、平城京、大阪府の船橋遺跡、京都府の小倉町別当町遺跡などからも出土している。これら無文銀銭の製作地は不明であり、将来品の可能性もある。

奈良県の飛鳥池遺跡、藤原京、平城京、大阪府の細工谷遺跡などからは「富本銭」が出土している。一般には「富本銭」と呼ばれているが「本」の字はすべて「本」ではなく「大」「十」の組み合わせであり文字学的には峻別しておくべきである。「七星文」についても北斗七星に絡めての道教的な解釈、ササン朝ペルシア貨幣の王の肖像の傍にある七星文との関連、聖書の「ヨハネの黙示録」第一章二十節にある「七つの星は七つの教会の使にして、七つの燈台は七つの教会なり」という聖句との関連など、様々な解釈の道筋が想定される。

以上、明日香の石造物の調査研究を整理し、古墳壁画や貨幣についても言及してきた。六世紀の古墳から出土したペルシアの切子碗をはじめ、正倉院の白瑠璃碗、漆胡瓶、螺鈿紫檀五弦琵琶、法隆寺の龍首水瓶、四騎獅子狩文錦、酔胡王・酔胡従の伎楽面、ペルシア語・ソグド語を伴う法隆寺伝来香木、須弥山石、石造男女像などの噴水施設、亀形石槽や亀石、二面石、猿石、川原寺十字礎石や薬師寺十字廊、亀と蛇の絡み合う玄武、鳩の顔をした朱雀、無文銀銭の十字刻印、富本銭の大と十字と七星文などの数々が、飛鳥から奈良時代にかけて、我が国に将来されている事実をみてきたわけである。

これらが日本固有の文化でないことは明瞭である。とすればこれらの文化的要素や淵源が奈辺にあるのか、そのことを追究していくのが次の課題となろう。

七．明日香の石造物等にみられる外来的要素　（図20～22）

『日本書紀』や『続日本紀』が吐火羅人や波斯人の来朝に関して記録を残しているのであれば、その事実を基軸にして、彼らが政治的・宗教的・経済的・文化的に関わったさらなる直接的・間接的な要素に注意深くあるのは不可欠なことである。『謎の大寺　飛鳥川原寺』における網干善教氏の指摘のように、トカラ、ペルシアを主流としながらも、ギリシア的、あるいはインド的要素を見出すことができるかも知れない。

図20をご覧いただきたい。ここには希臘・羅馬・波斯の貨幣を掲げているが、「ギリシア・ローマ神話」の亀、ペガサス、ヤヌス、ヘルメスに加えペルシアの「ゾロアスター教」のアフラマズダの拝火壇に注目しておきたい。

図20の左列からみていこう。

「亀」は古代ギリシアのアテネの外港であり、貿易の中心地であったアイギナ島で重視された。当初は海亀、後には陸亀も加わり、海路・陸路の安全や保護を司った。銀貨も制造し、フェニキアの重量標準を採用した（紀元前五世紀）。

「ペガサス」はコリントで重視され、オリュンポスでゼウスに仕え、雷霆を運ぶ役を担った有翼の馬である。ペルセウスがメドゥーサの首を斬った時にその首から生まれたとされる。貨幣の裏面にはコリント式のヘルメットをかぶったアテナ女神像が打刻されている（紀元前四世紀）。

「ヤヌス」はローマ神話に登場する神で、入口あるいは門の神として、人々の出入りを司り、水陸交通の神でもあった。往く年と来る年の境や、一年の季節も司り、それぞれ二つの顔や四つの顔を持った姿で描かれた。ものごとの「開始」を代表し、やがて暦の最初の月（January）に名を残すことになった（紀元前三世紀）。

「ヘルメス」は「ゼウスを父親としアポローンとは異母兄弟になる。神々の使者として、天空、地上、地下を駆けめぐり、二匹の蛇の絡まるケーリュケイオンの杖を手にし頭には翼の生えた旅行帽をかぶる。両足にはサンダルをはく。幸運と財宝をもたらすものとして通商や貿易を司る。地下を訪れる者として、夢や眠り、死者の霊魂をも運ぶ」とされる。

これらを知るとき、亀形石造物や亀石、龍首水瓶のペガサス、二面石とヤヌスの関係、山王権現背面の「タテガミ状の耳髪」のある猿石とヘルメスの旅行帽の翼など、今後確かめてみるべき課題は多いように思われる。

図20の右列には飛鳥にゾロアスター教の影響が波及していたかどうかを確かめるためにフスラウ一世（五三一―五七九）、オフルマズド四世（五七九―五九〇）、フスラウ二世（五九一―六二八）、アルダフシール三世（六二八―六三〇）、ヤズドゲルド三世（六三二―六五一）のペルシア貨幣を並べてみた。日本の天皇で言うと、継体、安閑、宣化、欽明、敏達、用明、崇峻、推古、舒明、皇極、孝徳天皇あたりまでの時代に相当する。表にはササン朝ペルシア王の肖像が描かれ、裏には二人のゾロアスター教の祭司と拝火壇が刻されている。

図21は希臘・羅馬・ササン朝ペルシアの印章である。

図21―1は紀元前四世紀のギリシアの印章で有翼の天使像を描いている。

図21―2は紀元前一世紀のグレコ・ローマンのカメオである。「ゼウス像」もしくはエジプトの「セラピス像」とみなされている。

図21―3は紀元前一世紀のローマの「ペガサス」の印章（アーサー・エヴァンズ・コレクション）である。

図21―4は紀元後一世紀のローマの「ヘルメス」の印章である。オリュンポス十二神のひとりで旅人や羊飼いの守護神、神々の伝令使でもある。翼はサンダルについている。

図21―5は紀元後一～二世紀のローマ神話の酒神「バッカス」とクレタ島の豊穣の女神「アリアドネ」である。バッカスに嫁ぎ、夫婦となった。

図21―6は「レギオン（軍団）の指輪」で第十七軍団への所属を示す。ただしこれはラテン数字の向きから指輪形署名印章ではない。

図21―7は紀元後三世紀のローマの印章で肖形は「魚」（イクテュス＝「神の子なるイエス・キリスト救い主」の頭文字）、クリスチャンの表象であった。

図21―8は紀元後四～五世紀のササン朝ペルシアの「ペガサス」である。

以上により、印章にも「ゼウス」「ペガサス」「ヘルメス」「バッカスとアリアドネ」などのギリシア的・ローマ的な神話のモチーフが好まれて用いられており、特に「バッカスとアリアドネ」の印章の図像については、大きな杯をもった老年の男性と彼に寄り添う女性の姿をもつ噴水構造を伴う「石造男女像」を髣髴とさせる。「ペガサス」の印章もローマのものとササン朝ペルシアのものとふたつ並ぶこととなったが、これに先の紀元前四世紀のギリシア貨幣のペガサスを加えて考えると、ペガサスの時代的・地域的変容が明らかとなる。そしてより大切なことは法隆寺龍首水瓶の胴部ペガサスとの関連である。

「猿石」の猿についてもヘラクレスから盗みを働こうとしてゼウスの怒りにふれた結果、猿に変えられたふたりの兄弟シロスとトリバロスの話が神話にあるが、これらも視界に取り込んでおく必要はある。猿についてはインドの『ラーマーヤナ』にも猿王ヴァーリン、猿の大将ハヌマーンの話があり、また橘瑞超は「中亜探検」（一九八〇）の中で西域南道のホータン付近から素焼の猿が出土していることを報告しているので、インド方面からの流入の可能性も視座に据えておいた方が賢明であろう。西域北道のクチャから「インド象と戦士（狩人）」を描いた印章が出土していることを考えあわせればなおのことであろう。

酒船石についても諸説がある。わたくしはこの巨石の形象が左右対称でないことに注目し、基本的にはこれは当時の飛鳥の地図ではないかと想定している。すなわち北方に耳成山・香久山・畝傍山（上京・左京・右京）の大和三山を、中央に飛鳥京（中京）を、香久山の下方に両槻宮を、そして畝傍山の下方に欽明天皇陵及び吉備姫王墓を配した、祖先祭祀を重んじながら都の平安を祈願した「神酒を用いる神事」と関わった装置ではなかったかと考えている。

そして亀と蛇の絡まった「玄武」についてはゼウスの最大の子であるアポロン（アポロンを太陽に結びつけるとき、アルテミスは月になる）との関連で考えている。水之江有一氏の『ギリシア・ローマ神話図詳事典』（一九九四）は「ドリュオペー」の項で「ドリュオペーが神アポローンに愛されたとき、神アポローンは乙女に近づこうと最初亀になって現われた。乙女はボール遊びにこの亀を用いたが、ドリュオペーが膝に乗せたとたん、アポローンは蛇に変わって交わった」と記している。北方は古来、神の住まわれるところ、ゼウスに次ぐ神が「亀と蛇の故事」をもって神格化され、玄武に造型されていったのではないかと考えるのである。

最後に図22をみていただきたい。これは関谷定夫氏の『図説新約聖書の考古学』（一九八一）から選びとったものである。アルクルフスの『巡礼記』（六七〇）に記された「ヤコブの井戸」の教会平面図及び縦断面は『薬師寺十字廊』のプランの意味を考えるための比較資料として、一見亀形にも見える八角形の「テオトコス（神の母）教会」オクタゴンの平面図は、八角形五段築成の「天武・持統合葬陵」を考える参考資料として、そしてビザンティン時代の「ラテン告知教会」のモザイク床は、当時の東ローマ帝国下の十字意匠の典型を示す資料として掲げた次第である。研究の進展に役立てばさいわいである。

以上で、飛鳥の石造物等に関する考察を終えることにする。続いてもうひとつの大きな立論の柱である「胡印」及び「景教印」の研究に進んでいくことにしよう。

八．漢魏晋南北朝時代の周辺民族官印「胡印」の研究（図23～25）

「胡」については幾つかの定義がある。歴史教育研究所編の『世界史事典』

（一九七八）は「胡」は「漢民族が広く塞外民族をさした呼称。秦・漢ではもっぱら匈奴をさした。後漢以後、西方のチベット系種族や中央アジア人・インド人までをさすようになった。唐ではさらに、中央アジアのソグディアナ（Sogdiana）諸国を胡国、そのイラン系住民を胡人と呼んだ。彼らは商業活動にすぐれたため、商胡ともいわれ、東西交通の陸路で活躍した」としている。また「五胡十六国」の「五胡」については「西晋末期より一世紀余りの間（三〇四～四三九）、匈奴、鮮卑、羯、氐、羌の五民族および漢人が華北に建設した小国」のことと説明している。

日本の代表的作家である松本清張氏は歴史小説『火の路』（文藝春秋一九七八年）の中で「『胡』は中央アジア以西のイラン族をさす」と記している。

わたくし自身は「印学」の立場から、同時代性と現地性に富む印章資料を研究し、ある場合には印章資料が文献史料の過誤を訂正するという「印学の主体性と優位性」に注目して、周辺民族官印、特に「胡印」の研究をすすめていく。日本の印章五大コレクション中の「胡印」及び羅福頤主編『秦漢南北朝官印徵存』（一九八七）中の「胡印」の調査結果は次のとおりである。

《胡印の研究》

(1) 在日印章五大コレクション中の「胡印」と時代順・階級別配列

（図23～24）

日本における印章五大コレクションとは太田夢庵、藤井静堂、大谷瑩誠、園田湖城、中村準策の旧蔵コレクションのことである。このうち太田夢庵旧蔵印以外の四大コレクションについては園田湖城の門弟である加藤紫山による封泥・印影・カード資料の作製があり、加藤翁の逝去（二〇〇〇年十二月）後、藤井守一有鄰館理事の紹介で十七年間翁から薫陶を受けていた筆者久米雅雄が文化庁と遺族の間に入って協議、翁の遺志を実現して、九州国立博物館に寄贈した。

太田夢庵旧蔵印は現在岩手県盛岡市所在の岩手県立博物館に寄贈され、現在、岩手県の所蔵である。「胡印」に関しては「新前胡佰長」「魏率善胡邑長」「魏率善胡仟長」「親晋胡王」「晋帰義胡侯」（図23上段五顆）及び「四角胡王」（図23下段左下隅）印を見出すことができる。

中村準策による蒐集印は奈良県奈良市所在の公益財団法人名勝依水園・寧楽美術館の所蔵である。現在調査中であるが「晋率善胡仟長」（駝鈕）、「晋率善胡佰長」（駝鈕）などの「胡印」を収蔵する（図23中段左から一列目及び三列目）。

園田湖城旧蔵印は現在大阪府和泉市久保惣記念美術館の所蔵である。「晋率善胡仟長」（羊鈕）、「晋支胡率善佰長」（羊鈕〔駝鈕か〕）印が所蔵されている（図23中段左から二列目及び四列目）。

大谷瑩誠旧蔵印は京都府京都市にある大谷大学に所蔵されている。図24の上段左から「漢帰義胡長」（駝鈕）、「魏率善胡仟長」（駝鈕）、「魏率善胡仟長」（熊鈕）、下段左から「晋率善胡仟長」（駝鈕）、「晋率善胡佰長」（駝鈕〔羊鈕か〕）、「晋率善胡佰長」（駝鈕）の合計六顆を見出すことができる（図24全六顆）。

藤井静堂旧蔵印は同じく京都市所在の藤井有鄰館に所在しているが「胡印」については未見である。

以上、日本の印章五大コレクションの中には少なくとも十六顆の「胡印」を見出すことができるが、鈕形をふくめ全体を整理すると、新前胡佰長（瓦鈕）⇩漢帰義胡長（駝鈕）⇩魏率善胡邑長（駝鈕）、魏率善胡仟長（駝鈕）⇩親晋胡王（羊鈕）、晋帰義胡侯（羊鈕）、晋率善胡仟長（羊及び駝鈕）、晋率善胡佰長（羊及び駝鈕）、晋支胡率善佰長（羊及び駝鈕）と要約することができよう。

続いて在中国の「胡印」を概観し整理することにしよう。

(2) 在中国の「胡印」と時代順・階級別配列

(図25)

在中国の印章を研究するのに羅福頤主編「秦漢南北朝官印徴存」(一九八七)は有用な著作のひとつである。書物の性格上、鈕形は示されていないが、この厖大な書物から「胡印」を探し、時代順・階級別に配列していくと、前漢末(新)から後漢を経て、魏晋へと続く「胡印」を見出すことができる(図25)。

図25の上段右上は先ほどふれた日本岩手盛岡の太田夢庵旧蔵印であるが、それ以外は在中国の印章である。所蔵機関は中国歴史博物館、故宮博物院、上海博物館、杭州西泠印社、待時軒印存等である。

図25上段中は「新前胡小長」(瓦鈕)、図25中段は左から「漢帰義胡長」(駝鈕)、「漢破虜胡長」(駝鈕)、「漢率善胡長」(駝鈕)、「魏率善胡邑長」(駝鈕)、「魏率善胡仟長」(駝鈕)、「魏率善胡佰長」(駝鈕)、図25下段は左から「親晋胡王」(駝鈕)、「晋帰義胡王」(駝鈕)、「晋帰義胡侯」(駝鈕)、「晋率善胡邑長」(駝鈕)、「晋率善胡仟長」(駝鈕)、「晋率善胡佰長」(駝鈕)である。

以上を時代順・階級別に整理してみると、新前胡小長(瓦鈕)⇩漢破虜胡長(駝鈕)、漢率善胡長(駝鈕)、漢帰義胡長(駝鈕)⇩魏率善胡邑長(駝鈕)、魏率善胡仟長(駝鈕)、魏率善胡佰長(駝鈕)⇩親晋胡王(駝鈕)、晋帰義胡王(駝鈕)、晋帰義胡侯(駝鈕)、晋率善胡邑長(駝鈕)、晋率善胡仟長(駝鈕)、晋率善胡佰長(駝鈕)となる。

(3) 在日本・在中国の「胡印」の歴史的変遷と総括

さていままで日本に所在する「胡印」及び中国に所在する民族官印のうち「胡印」を探索し、それらを時代別・階級別に考察してきた。「胡印」は中国の官制史上、きわめて重要な歴史資料である。ここでは印学からみた「胡」の歴史的発展と中国の官制との関わりについて、全体的な総括をおこなっておきたい。

「新前胡佰長」印や「新前胡小長」印が示すように「胡」は前漢末期からその社会的存在が認識されている。ただし鈕は瓦鈕であり、「新難兜騎君」印(図25上段の左端)も示すように、塞外の少数民族に対しては(特例を除くならば)瓦鈕が一般的であったことが知られる。印を頒給されたのも「胡」の「小長」、「佰長」クラスであったことが知られる。

後漢以後、駝鈕印が登場するが、授与されるのは「漢破虜胡長」「漢率善胡長」「漢帰義胡長」などの「胡長」クラスとなる。

魏以降、駝鈕の「魏率善胡邑長」「魏率善胡仟長」「魏率善胡佰長」などが示すように「胡」は邑長⇩仟長⇩佰長といった組織化が進む。

晋の時代になると、「親晋胡王」「晋帰義胡王」「晋帰義胡侯」「晋率善胡邑長」「晋率善胡仟長」「晋率善胡佰長」などの印章が示すように、「胡」は王・侯を伴う巨大な国家組織に成熟しており、また印学的にも「帰義」は王・侯に用いる修飾語、「率善」は邑長・仟長・佰長に用いる修飾語であることがはっきりと分化してくる。

そのほか「晋支胡率善佰長」印(図23中段右端)により晋代に「胡」とは別に「支胡」の存在したこと、また「四角胡王」(図23下段左端)については北涼(三九七―四三九)に「四角羌王」があるので年代判定の一助となる。

なお彼等「胡人」の活躍した領地についてはどうか。本章冒頭の《「胡」の文献史料的定義》のところでは「秦・漢ではもっぱら匈奴をさした。後漢以後、西方のチベット系種族や中央アジア人・インド人までをさすようになった」「南北朝から唐代にかけては（ソグド人は）胡人とよばれた」などの定義を紹介したが、印章研究の方法によれば「胡人」をさらに詳密に抽出することができる。すなわち漢代には上記の三種の「胡長」のほかに「漢匈奴悪適尸逐王」「漢匈奴帰義親漢長」「漢匈奴破虜長」「漢帰義鮮卑王」「漢青羌邑長」「漢率善氐佰長」「漢叟邑長」「漢夷邑長」などがあり、魏代には「魏率善胡邑長」のほかに「魏烏丸率善邑長」「魏屠各率善邑長」「魏率善氐邑長」「魏率善羌邑長」などがあり、また晋代にも「親晋胡王」のほかに「親晋氐王」「親晋羌王」「晋蛮夷王」「晋屠各率善仟長」「晋匈奴率善佰長」「晋高句驪率善邑長」「晋扶餘率善佰長」「晋率善韓佰長」などが確認されており、「胡」はこれら「匈奴」「鮮卑」「青羌」「氐」「叟」「烏丸」「屠各」「蛮夷」「羌」「高句驪」「扶餘」「韓」などとは基本的に相異なる民族であると識別できる。『魏書』の中に「烏丸は東胡なり」「鮮卑も亦東胡の余なり」の記述があるが、これらは「胡」を基軸にしての表現である。その理由で「胡」の領土は彼らの占拠した土地以外の場所であると判断することができよう。印章の「胡」は中華思想を基底に据えるならば、基本的には東夷・北狄・西戎・南蛮のうちの西方で活躍した民族であると判断でき、時代も漢魏晋南北朝の時代にかけて長期間にわたって栄えた民族国家であることを知るのである。印学はこのように文献史料を超えた主体的役割を担いつつ歴史像を描くのである。

なおこれら「胡」に対して頒給された中国官印のほかに、中央アジア探検で有名なイギリスのオーレル・スタイン Aurel Stein（一八六二―一九四三）による楼蘭での「アテナ」「ゼウス」「ヘラクレス」「エロス」など希臘・羅馬の神々の封泥の発見、スエーデンのスウェン・ヘディン Sven Hedin（一八六五―一九五二）によるホータン（于闐）での印章の発見、日本の大谷光瑞（一八七六―一九四八）によるヨトカンからの「有翼馬」の印章の発見などは、「商胡」として東西貿易に従事したイラン系ソグド人の活躍の証左としても重要である。そのほかにクチャ（亀茲）から「インド象」の肖生印が発見されているが、これも当時の交易圏の中に印度が含まれていたことを示す物証としてきわめて重要である。

いずれにせよ、中国官印である「胡印」は南北朝時代以前の前漢末期以降に確認されており、前漢末期に瓦鈕の「前胡」印、後漢以後に駝鈕の「胡長」印、魏（二二〇―二六五）以後、「胡」の急速な組織化が進み、邑長⇩仟長⇩佰長といった階級組織構成を印章から確認できること、西晋（二六五―三一六）以降、東晋（三一七―四一九）、北魏（三八六―五三四）の時代にかけて「胡」は羊鈕・駝鈕の「王印」、「侯印」等を下賜されるほどの大勢力に成熟しており、中国の冊封体制下で強大な国家組織へと変貌していることをみてきた次第である。この歴史的背景に波斯系商胡であるソグド人（粟特人）がもたらした大きな経済的基盤があったことは言うまでもない。

以上が漢魏晋南北朝時代の「胡印」研究の概要である。

九．宋元「景教印」の研究

《景教印の研究》

（図26）

「景教印」については二〇一三年に「景教印研究―西域文化東漸考序説―」の中で既に論じている（『西泠印社国際学術研討会論文集』参照）のでここで

はその論の詳細を繰り返さない。景教史を補足し要点のみを記すにとどめる。

唐の高祖皇帝（六一八―六二六在位）のあとの太宗皇帝（六二六―六四九年在位）の貞観九年（六三五）に、波斯人Alopen（阿羅本）を代表とする宣教団二十一人が長安に入り、波斯教、彌施訶教と呼ばれるNestorius（三八六―四五一）派のキリスト教を伝えたことはよく知られている。このことは太宗による要請であったとも言われているが、かれら宣教団は国際都市長安に入り、市内の国際市場である西市付近の義寧坊に「大秦寺教会堂」を建てた。また世界最大の図書館において「聖書」「聖典」を漢訳し、太宗自身も皇宮で三年間聖書を学んだと伝えられている。

続く高宗皇帝（六四九―六八三年在位）の時には阿羅本を「鎮国大法主」に任命し、全国十道に「景教」の教訓を弘めるように尽力している。しかし高宗の皇后であった則天武后（六九〇―七〇五年在位）の時代には彼女自身が仏教の女僧であり、また仏教徒による景教批判の煽りも強くあったために、景教徒にとっては苦難の時代となった。

中宗（七〇五―七一〇在位）、睿宗（七一〇―七一二在位）の時代を経て、玄宗皇帝（七一二―七五六在位）の時代を迎えると、皇帝は五兄弟に福音堂に出席すること、祭壇を築くこと、神の祝福を祈願すること等を勧め、再び景教の勢力を回復させる動きに転じている。加えて玄宗は「大秦寺教会堂」内に五人の先任皇帝たち、すなわち高祖、太宗、高宗、中宗、睿宗の肖像画を安置させ、大秦寺に絹百匹を下賜、国家の安泰を祈願している。

玄宗のあとの粛宗皇帝（七五六―七六二年在位）も新たに景教の教会堂を五か所に建設、代宗皇帝（七六二―七七九年在位）も聖誕節に香や餅を景教徒に下賜して厚い信仰心を表明した。そして徳宗皇帝（七七九―八〇五在位）の時に「大秦景教流行中国碑」（七八一）が建立され、西暦六三五年以来の約一五〇年にわたる「中国景教布教史」（設立と教理と東方伝道史）が語られるのである。

その後の「景教の歴史」については武宗皇帝（八四〇―八四六年在位）の会昌五年（八四五）に異変が起こる。性質が粗暴で遊楽を好み、道教を信奉していた武宗は廃仏政策をとり「会昌の廃仏」と言われる仏教大弾圧を行ない、殆どの仏寺を廃し、僧尼を還俗させ、寺田を没収した。此の時「景教」も同様に迫害を受けて急速に衰退する。

宋代（北宋：九六〇―一一二七、南宋：一一二七―一二七九）には北西辺境でわずかに信仰されたにすぎなかった。元代（一二七一―一三六八）になると支配者層に厚遇され、各地に信者層が増加したとされるのが一般的な理解である。

では景教遺物から見ていくと、この歴史的な経緯は具体的に裏付けられたであろうか？「景教印研究」でも採りあげたように、景教遺物としては唐の建中二年（七八一）に陝西省長安に建立の「大秦景教中国流行碑」（漢文とシリア文）、回教暦二十一年（八三七）の紀年をもつトルキスタン・ナマガン（Namagan＝納瑪干）出土の「景教墓誌」（ソグド文九行一七八字）、河北省房山県出土のシリア語の「詩編」第三十四篇五節の聖句等をともなう「景教十字架形石幢基石」二基、江蘇省江都県の回教寺院から出土の「景教墓碑」、福建省泉州発見の十字架形遺物」三点、佐伯好郎博士が『景教の研究』（一九三五）で紹介したセミリチエンスク（Semirichensk＝賽米利切恩斯克）出土の八五八年、九一一年、一二〇一年～一三四二年の年紀をもつ「景教墓石」（一二四九、一二五二、一二五三、一二六三、一二六七、一二七八年のものを登載）などを挙げることができた（図26）。ほかに敦煌発見の「景教人物画像」（八～九世紀）や内蒙古自治区発見の「景教十字形銅杖飾及び景教墓誌」

（蒙古汗国～元）なども掲載しているので参照されたい。これらの諸資料は全体的には上述の文献史料による「景教史」とほぼ符合している。

「景教印」については楊廣泰編選『宋元古印輯存』（文物出版社、一九九四）を根据に筆者が分類整理をして「銅製十字架形遺物、景教印的類型與編年」を作成し、結果として「景教印」については(a)ネストリウス派のもの、(b)キリスト教別派のもの、(c)ゾロアスター教、摩尼教（ユダヤ・キリスト教・ギリシア＝グノーシス主義・仏教等を習合）、仏教など他宗教と融合したものの三種に分類した。代表的な印章を上段・中段・下段に配列している（図7）。

印章以外の遺物については、上述のように、唐代、蒙古汗国時代及び元代の遺物を確認することができるにもかかわらず、但し現時点で確認の「景教印」はおおむね宋元のものが主流で、しかも蒐集品が中心である。

そこで次に課題となるのは前漢末期から後漢魏晋南北朝時代にかけて見出される中国の官印である西域系の「胡印」と宋元時代の民間宗教印である「景教印」との間隙を埋める、いわば隋唐時代の西域系印章の存否を確認することとなろう。そこで次に肉薄したいのが「日本法隆寺伝来の烙印十字」である。

十．日本法隆寺伝来香木烙印十字の検討　（図27～31）

日本の江戸時代の書物の中に、日本の奈良時代の印章で、日本の律令官印でもなく私印でもない興味深い印章（烙印）について採りあげた文献を見出す。穂井田忠友（一七九二―一八四七）は『埋麝発香印部』という著作でよく知られた人物であるが、もうひとつの著作である『観古雑帖』（一八四一）の中に「法隆寺蔵沈水香刻字及烙印」という記述と図像がある（図27）。その中で香木銘と烙印印影が紹介されており、「刻字必是古韓字　烙印必是韓商之所用　並未得読解」「此木ハ韓字及烙印アリ　天竺モノニ非ル事知ヘシ」「字五年云々ハ天平宝字五年（七六一）ノ量定ト云事也」「烙印ノ字ハ未考」と記されている。この法隆寺伝来の香木の年代を天平宝字五年（七六一）、香木銘は古韓字、烙印文字は不詳であるとした。

長谷川延年（一八〇三―一八八七）は安政四年（一八五七）に『博愛堂集古印譜』を著わしているが、その中の「烙印之部」においてただ印影のみを登載した（図28）。

明治時代に入り、古谷清は『考古学雑誌』第一巻第五号の中に「旧法隆寺所伝香木彫刻の異体文字と烙印に就きて」（一九一一）なる論文を発表し、烙印は「シリア文字」であり、十字は「景教或いは摩尼教の信徒のものか」とした。近年、奈良大学の東野治之氏は『ミュージアム四三三号』（一九八七）、『正倉院』（一九八八）、『書の古代史』（一九九四）等において、香木刻銘は波斯のパフラヴィー（巴列維）文字で右から左へ「(bwhtw[dly)」と読み「人名」（ボーフトーイ）であること、焼印はソグド（粟特）文字で左行が「nym」（ニーム）で「二分の一」、右行が「syr」（シール）で「重さまたは貨幣の単位」と解せられ、全体として「半両」の意味になり、「下部に十字形の飾りを置いたもの」とされている（図29）。これらの解釈についてはパフラヴィー文字については四天王寺国際仏教大学の熊本裕氏の「補説一　Pahlavi刻銘について」、ソグド文字については当時同大学に勤務し現在は京都大学所属の吉田豊氏の「補説二　ソグド語の焼印について」なる、各々上記『ミュージアム』への論文を基底に据えておられるようである。

但しこれらの見解に対して異論がないわけではない。『古代ペルシア』（一九七四）、『ゾロアスター研究』（一九七九）、『ペルシア文化渡来考』（一九八〇）などの著作のある京都大学の伊藤義教氏は「法隆寺伝来の香木銘

をめぐって」（『東アジア古代文化五四号』一九八八）の中で、刻銘は「ボーフトラーク（bw[x]'tk）」（末尾kで「あなたが救われて（ましますように）」、焼印の文字は「半両」と読んでも「関連分野への大きい拡がりは期待しにくく」、そのことを難点として「この焼印は交易に関連した一種の符牒のようなものであろう」とした。

また『古代の日本とイラン』（一九八〇）などの著作で知られる大阪外国語大学の井本英一氏は「法隆寺伝来の白檀と栴檀」（毎日新聞一九八七年六月三日夕刊）では刻名を「ボーフトール（boxtor）」と読み、「ボーフタール（boxtar）」（救世主）の方言形とした。

私自身は先に挙げた景教碑文（図26）や天正九年（一五八一）の「田原礼幡」墓碑から慶長十八年（一六一三）の「東野壽庵」墓碑にいたる大坂・京都で発見の吉利支丹墓碑（図30）を調査研究してきた経緯をふまえ、また「半両」という解読が関連分野への適合的な拡がりをみせていないという現実に照らすとき、解読作業に何か誤りが潜んでいないかと危惧するものである。わたくしは、これら景教碑文や吉利支丹墓碑の十字形の位置の在様を観察する時、図26、図30のいずれの場合も「十字形」は全体構図の上方に刻まれていることから、すなわち「十字形は仰ぎ見るもの」との立場から、江戸時代の穂井田忠友以来の伝統的な布置を覆し、図31のように印章の天地を逆転させて読むべきではないかと考えている。玄奘（六〇二―六六四）の『大唐西域記』ソグド総記は「その文を竪に読んでいる」と記しているが、碑文には横書きも存在する。わたくし自身は飯島紀氏の『楔形文字の初歩　歴史と文法』（泰流社、一九九四年）、同氏『アラム語―日本語単語集　シリア語付き』（国際語学社、二〇〇五年）、吉田豊氏の「ソグド文字表」（前掲『ソグド人の美術と言語』）などを検討した結果、「NYM（半分）＋SYR（両）」を「RYS（救い、或いは頭、始まり）＋MYN（水、国、国民）」（レーシ〔レーシュ〕・メーン）と読み、「諸国民の救い、或いは諸国民の頭」の意味で解釈している。RESのSの音にはsamechとschinの二種の音が存在するが、厳密な対音を考えれば「救い」、聲韻変化の許容範囲とすれば「頭」の意味でありうるとの意味である。小辻節三氏は『ヒブル語原典入門』発音解説の中でSamekhとSin＝Shinの発音について「ヒブル人もSamekhと点が左に置かれるSinとは、時に、間違えたようである」と述べているので、過度に厳密に成りすぎない方がよいのかもしれないと考え、二つの解読の可能性を留保した。ちなみに「水」が「もろもろの民・群衆・国・国語」をあらわす例として『ヨハネの黙示録』第十七章十五節の「御使また我に言ふ『なんぢの見し水、すなはち淫婦（大なるバビロン）の坐する処は、もろもろの民・群衆・国・国語なり』」、「頭」の権については『コリント前書』第十一章三節の「凡ての男の頭はキリストなり、女の頭は男なり、キリストの頭は神なり」の聖句が参考になろう。

いずれにせよ「諸国民の救い」もしくは「諸国民の頭」という天地逆転による解読は井本氏の刻銘を「救世主」と読む結論とも符合しており、八世紀中葉（七六一）以前にペルシア系ソグド人の景教徒・摩尼教徒（王族もしくは臣下の可能性がある）が、仏事に必要とする香木（香木に「仏」字の墨書あり）を法隆寺に献納したものとして重要な資料ということができよう。そうであるとすればこの「法隆寺伝来の香木押捺の十字烙印」（七六一）は「アジア最古の基督教関係印」ということになり、漢魏晋南北朝の「胡印」と宋元の「景教印」との間を繋ぐ貴重な印章資料ということになるのである。

十一・韓国・統一新羅時代の景教もしくは基督教遺物（図32）

最後にみておきたいのは、日本の飛鳥・奈良・平安時代に、中国では隋唐の時代に、中国と日本の間に位置する朝鮮において、「胡」の要素、或いは波斯系景教もしくは基督教の要素等をもった文化的所産を確認できるかどうかの問題である。

大韓民国京城特別市所在の崇實大学韓国基督教博物館から『図録』（二〇〇四）が刊行されているが、内容を調査していくと幾つかの関連資料に注意がひかれる。

上段左の図32－1は「石製景教十字架」であり、一九五六年に慶州の仏国寺で出土した。法量は二四・五×二四・〇×九・〇cmを測り、統一新羅時代（八～九世紀）の遺物とされる。

上段右の図32－2は「瑪利亜像」であり、同じく慶州出土であり、法量は七・二×三・八×二・八cmを測る。統一新羅時代（八～九世紀）の遺物である。

中段左の図32－3は「十字紋装飾」と名付けられ、慶州出土、法量は五・八×五・六cm、統一新羅時代（八～九世紀）に属する。

中段右の図32－4も「十字紋装飾」であり、慶州出土、法量は二・四×三・二cm、統一新羅時代（八～九世紀）の遺物である。

下段左の図32－5は「青銅海獣葡萄文鏡」で、出所は不明、法量は一二・二×一二・二cmを測る。唐代に盛行し、宋代の再笵鏡も少なくない、が新羅・高麗時代の九～十二世紀の遺物と考えられている。

下段右の図32－6は「青銅胡人像」と名付けられており、平壌出土、法量は七・九×五・一×二・五cmを測り、時代は紀元前一世紀～紀元後三世紀とされている。この年代観が正しいとすれば「新前胡小長」や「新前胡佰長」などの「胡印」が前漢末期から登場していたこととも符合していて興味深い（図25）。

このように朝鮮半島においても紀元前後には「胡人」が到来しており、統一新羅時代の八～九世紀時代には波斯系の「景教」・「摩尼教」・別派の「基督教」（カトリック）などが伝来していたことは確かな事実のようである。その流入の経路については「遣唐使」の経路と同様、初期の「北路」（新羅道）のほかに、中期の「南島路」、末期の「南路」など江南への経路なども、政治・軍事・外交の要件に照らして考慮しなければならないと考えられる。

『日本書紀』「崇峻紀」元年（五八八）に百済国が寺工太良未太・文賈古子、瓦博士麻奈文奴らを献じて始めて法興寺（飛鳥寺）を作らせたと記しているが、これらの漢字表記はDara-Mitrdad, Minkar Kus, Marnar Minagなど、江南に来ていた西域のペルシア人の名前の漢訳として解釈する見解（井本英一氏『古代の日本とイラン』参照）があり、また『続日本紀』「聖武天皇紀」の天平八年（七三六）の条に「波斯人李密翳等授位有差」といった、一見、中国姓か韓国姓かと見まちがう「李」姓が「波斯人」の姓である事実に照らして考える時、その出自の決定については十二分に慎重であった方がよいと考える。

十二・おわりに――まとめにかえて――

波斯人李密翳の来朝後十八年経過して、唐の仏僧（揚州江陽＝江蘇省江都県出身）であり、南都律宗の開祖である鑑真（六八八―七六三）が、十二年の歳月と五回の航海の失敗を経て、天平勝宝六年（七五四）に日本に到着している。来日後、東大寺に日本最初の戒壇を設け、聖武上皇（七〇一―七五六）・光明皇太后（七〇一―七六〇）ら四〇〇余人に授戒し、天平宝字三年（七五九）に唐招提寺を建立した。光明皇后の勧めにより国分寺・国分尼寺の造営を発願

（七四一）し、娘孝謙女帝のおりに東大寺大仏開眼供養（七五二）を見届けた聖武は天平勝宝八年（七五六）に没した。天平二年（七三〇）に（『続日本紀』「淳仁天皇紀」に「又設悲田施薬両院。以療養天下飢病之徒也」とあるように）貧しい病人に施薬する施薬院や貧窮者・孤児を救うための悲田院（その淵源は四天王寺や興福寺と関わる）を設けて自ら世話をされた光明子は天平宝字四年（七六〇）六月七日に亡くなられている。法隆寺伝来の香木は翌年の「（天平宝）字五年三月四日」（七六一）の墨書をもつものであり、生前、光明子から無量の光壽に浴していた波斯系信徒たちからの「感謝にみちた」「哀悼の意」をこめた献納宝物ではなかったかと推測するのである。香木が二本あるのは、あるいは聖武と光明のお二方に対する献納品であったことを示しているのかもしれない。なお光明皇后は大和国添上郡佐保山に葬られている。

以上、「法隆寺伝来烙印十字考」と題して考察をすすめてきた。最初に①『日本書紀』や『続日本紀』の記述に波斯系の吐火羅人や波斯人の来朝記事が登載されていることを紹介し、奈良の正倉院に白瑠璃碗、漆胡瓶、螺鈿紫檀五弦琵琶、法隆寺に龍首水瓶、四騎獅子狩文錦、酔胡王・酔胡従の伎楽面、波斯語刻銘及び粟特語烙印十字を伴う香木などが伝来していることを確認した。そののち②吐火羅・波斯・粟特とは何かを地理学的・民族学的に追究し、「胡」とは粟特を中核とするイラン系民族であることを把握した。その上で③漢魏晋南北朝時代の在日在中の「胡印」の研究、また④唐宋元時代の「景教遺物」及び「景教印」の研究を行うことによって、印学的に西域系波斯人・粟特人の民族的発展を辿るとともにササン朝波斯王国の盛衰史を通観した。そして漢魏晋南北朝時代の「胡印」と宋元「景教印」の間隙を埋める資料を考究すべく⑤法隆寺伝来香木に刻まれた中期波斯語による刻銘及び烙印十字の検討を行い、刻銘については「救世主」もしくは「あなたの霊が救われますように」との読みが可能であり、烙印十字の粟特文字については、景教碑文や吉利支丹墓碑に刻まれた十字文の図像学的位置を参考に、江戸時代以来の穂井田忠友、長谷川延年らの読んできた印文の向きを天地逆転させ、NYM・SYR（半両）をRYS・MYN（諸国民の救い、もしくは諸国民の頭）と読み、この香木を天平宝字五年（七六一）以前に波斯系粟特人である「景教徒」もしくは「摩尼教徒」が法隆寺へ献納した品と判定した。⑥はたして八世紀中葉の当時に基督教十字が中国以東に伝播していたかどうかについては、一九五六年に大韓民国の慶州仏国寺で発見された統一新羅時代の「石製景教十字架」「瑪利亜像」「十字紋装飾」などを積極的証左とみなした。⑦「景教」もしくは「基督教」の伝播のルートについては「新羅道」経由、あるいは「南島路」「南路」などと関わる「江南」経由の道筋も考えられるが、天平宝字五年（七六一）の墨書銘をもつ法隆寺伝来の香木二本はそれぞれ天平勝宝八年（七五六）に亡くなられた聖武天皇、天平宝字四年（七六〇）に亡くなられた光明皇后に対する哀悼供養の献納宝物であったかもしれないというのが結論である。

印章学の立場から言えば法隆寺伝来香木の烙印十字はその形状から景教十字ではありえず、ビザンチン帝国下のギリシア・カトリックの十字か摩尼教十字の可能性をもつものである。香木にラテン文字やギリシア文字ではなくペルシア文字やソグド文字を伴うことから、わたくし自身はカトリック十字ではなくペルシア人マニ（二一六―二七七）を始祖とする摩尼教の十字であろうと判断している。

今後さらに多くの資料が発見されて正しい結論に導かれることを期待して、この稿を閉じることにする。

【参考文献】

松本清張　『火の路』上下、文藝春秋、一九七五年
松本清張　『ペルセポリスから飛鳥へ』、一九七九年、日本放送出版協会
北九州市立松本清張記念館　『松本清張『火の路』誕生秘話』、二〇〇四年
久米雅雄　『日本印章史の研究』、雄山閣、二〇〇四年
久米雅雄　『アジア印章史概論』、錫安印章文化研究所、二〇〇八年
久米雅雄　「『景教印』の研究」『立命館大学考古学論集Ⅵ』、立命館大学考古学論集刊行会、二〇一三年「景教印研究―西域文化東漸考序説―」『西泠印社一一〇年社慶国際学術研討会論文集』、西泠印社出版社、二〇一三年
家永三郎・井上光貞校注　『日本書紀』下、岩波書店、一九六七年
黒板勝美・国史大系編集会　『続日本紀』吉川弘文館、一九七七年
久米邦武　『上宮太子實録』、上宮教会蔵版、一九〇五年
石田幹之助　「隋唐時代に於けるイラン文化の支那流入」『東洋思潮』、岩波書店、一九三六年
石田茂作　『正倉院伎楽面の研究』、美術出版社、一九五五年
東京国立博物館　『特別展　法隆寺献納宝物』、一九九六年
歴史教育研究所編　『世界史事典』、旺文社、一九七八年
羽田明・山田信夫ほか　『西域』、河出書房新社、二〇〇七年
辰巳利文編　『明日香村史』上中下、明日香村史刊行会、一九七四年
石田茂作　『飛鳥時代寺院址の研究』、第一書房、一九三六、一九七七年（復刻）
飛鳥資料館　『飛鳥の石造物』、一九八六年、『あすかの石造物』、二〇〇〇年
奈良国立文化財研究所　『川原寺発掘調査報告』、一九六〇年
網干善教　『謎の大寺　川原寺』、日本放送出版協会、一九八二年
奈良文化財研究所　『飛鳥・藤原京展』、二〇〇二年
奈良文化財研究所　『薬師寺十字廊の発掘調査』、二〇一四年
堀池春峰　「薬師寺縁起」、薬師寺、一九六七年
飛鳥古京顕彰会・明日香村教育委員会・奈良文化財研究所　『新改訂キトラ古墳と壁画』、二〇〇六年
織田武雄　『地図の歴史―世界篇』、講談社、一九七四年
織田武雄　『地図の歴史―日本篇』、講談社、一九七四年
李鉄生　『古希臘羅馬幣鑑賞』、北京出版社、二〇〇一年
李鉄生　『古波斯幣』、北京出版社、二〇〇六年
岡野智彦、山内和也、足立拓朗、須藤寛史　『サーサーン朝ペルシアのコイン』、中近東文化センター、二〇〇三年
水之江有一　『ギリシア・ローマ神話図詳事典』、北西堂書店、一九九四年
Elizabeth Burr (translated) "The Chiron Dictionary of Greek & Roman Mythology", Chiron Publications, 二〇〇〇年
関谷定夫　『図説新約聖書の考古学』、講談社、一九八一年
Edward Norman "The House of God", Thames and Hudson, 一九九〇
河田清史　『ラーマーヤナ（インド古典物語）』上下、第三文明社、一九七一年
樋口隆康　『ガンダーラへの道―シルクロード調査紀行』、サンケイ出版、一九八〇年
佐藤圭四郎　『古代インド』、河出文庫、一九八九年
田村圓澄　『半跏像の道』、学生社、一九八三年（隋に対する冊封を拒む論理）
橘瑞超　『中亜探検』、中央公論社、一九八九年
太田孝太郎　『夢庵蔵印』、一九二〇年

太田孝太郎『楓園集古印譜』、一九二九年
太田孝太郎『楓園集古印譜続』、一九三二年（藤井静堂、大谷禿庵、大西行禮、太田夢庵、園田湖城）
『書道全集』、平凡社、一九三二年
神田喜一郎・野上俊静『中国古印図録』、大谷大学、一九六四年
中村準佑・藤枝晃『寧楽譜』、財団法人寧楽美術館、一九六九年
神田喜一郎・加藤慈雨楼『平盦攷蔵古璽印選』、一九八〇年
加藤慈雨楼『漢魏晋蕃夷印彙例・漢魏六朝蕃夷印譜』、丹波屋、一九八六年
岩手県立博物館『太田孝太郎コレクション中国古印』、一九九〇年
羅福頤主編『秦漢南北朝官印徴存』、文物出版社、一九八七年
楊廣泰編選『宋元古印輯存』、文物出版社、一九九四年
孫慰祖『中国印章―歴史與芸術―』、外交出版社、二〇一〇年
M. Aurel Stein "Sand-Buried Ruins of Khotan", Hurst And Blackett, Limited, London, 一九〇四年
佐伯好郎『景教の研究』、東方文化学院東京研究所、一九三五年
鄭学鳳『アジア教会　景教の物語』、図書出版東西南北、二〇一一年
久米雅雄「景教印研究―西域文化東漸考序説―」『西泠印社一一〇年社慶国際学術研討会論文集』、西泠印社出版社、二〇一三年
穂井田忠友『観古雑帖　埋麝発香』、日本古典全集刊行会、一九二八年
長谷川延年『博愛堂集古印譜』一八五七年、『平安・鎌倉・室町・江戸　秘奥印譜』、国書刊行会、一九九二年
東野治之「法隆寺献納宝物　香木の銘文と古代の香料貿易」『Museum』四三三号、東京国立博物館、一九八七年
熊本裕「Pahlavi 刻銘について」（同書所収）
吉田豊「ソグド語の焼印について」（同書所収）
東野治之『正倉院』、岩波書店、一九八八年
東野治之『書の古代史』、岩波書店、一九九四年
久米雅雄「茨木の吉利支丹遺物と歴史」『新修茨木市史　第九巻　史料篇美術工芸』、茨木市、二〇〇八年
久米廣陵「京阪吉利支丹墓碑の編年と歴史的環境の復元」（同書所収）
井本英一『古代の日本とイラン』、学生社、一九八〇年
伊藤義教「ペルシア文化渡来考―シルクロードから飛鳥へ―」、岩波書店、一九八〇年
伊藤義教「法隆寺伝来の香木銘をめぐって」『東アジアの古代文化』五四号、大和書房、一九八八年
飯島紀『楔形文字の初歩　歴史と文法』、泰流社、一九九四年
飯島紀『アラム語―日本語単語集　シリア語付き』、国際語学社、二〇〇五年
曽布川寛・吉田豊編『ソグド人の美術と言語』、臨川書店、二〇一一年
小辻節三『ヒブル語原典入門』、ヒブル語研究同志会、一九六五年
聖経公会在香港『旧新約全書』、一九八六年
崇實大学韓国基督教博物館『崇實大学韓国基督教博物館図録』、二〇〇四年
久米雅雄「松本清張『火の路』とペルシア文化の飛鳥東漸」（第三十回松本清張研究会記念研究発表要旨）、二〇一四年、東京大学にて発表

【図版出典】

図1　印章学への目覚め―「アラビアのロレンス」（T.E.Lawrence）と考古学―（拙著『アジア印章史概論』二〇〇八より）

図2　「金印奴国説への反論」一九八三年―倭の奴国王、それとも伊都国王？―（同書）

図3　「新邪馬台国論」一九八六年―筑紫女王国・伊都国（主都）の東征戦争と畿内邪馬台国（副都）への道―（同書）

図4　「親魏倭王」金印、「魏率善倭中郎将」「魏率善倭校尉」銀印と魏晋の銅印（同書）

図5　「シルクロードの印章」二〇〇二年―ヘディン、スタイン、大谷光瑞および「封検」の発見―（同書）

図6　尼雅遺跡出土の「鄯善都尉」封泥、敦煌の「文徳左千人」「敦徳歩廣曲候」銅印、クチャ出土のインド象、ヨトカン出土のペガサスの印章（同書）

図7　「景教印の研究」二〇一三年―銅製十字架形遺物「景教印」の類型と編年―（『景教印』の研究」二〇一三より）

図8　吐火羅人・波斯人の来朝と西域文物の将来―法隆寺の水瓶等―

図9　正倉院の白瑠璃碗・漆胡瓶・螺鈿紫檀五弦琵琶及び法隆寺献納宝物の龍首水瓶・四騎獅子狩文錦

図10　法隆寺献納宝物　木造彩色　伎楽面（酔胡王・酔胡従）

図11　法隆寺献納宝物　香木　栴檀香と白檀香（字五年〔七六一〕の墨書、波斯文字の刻銘及びソグド文字の烙印十字の押捺を伴う）（『特別展　法隆寺献納宝物』一九九六より）

図12　西域要図（羽田明・山田信夫ほか『西域』二〇〇七より）

図13　飛鳥の石造物　欽明天皇陵と猿石、亀石、益田岩船、酒船石など（『あすかの石造物』二〇〇〇より）

図14　石人像、須弥山石、酒船石、酒船石遺跡亀形石槽など（同書）

図15　吉備姫王猿石（女と山王権現、僧と男）光永寺の顔石、高取の猿石、橘寺の二面石、立石、マラ石、出水酒船石など（同書）

図16　川原寺寺域資料　亀石、塔及び東回廊、回廊西北隅、西僧房実測図の十字礎石（『弘福寺　川原寺発掘調査報告』一九六〇より）

図17　川原寺礎石集成と十字礎石と薬師寺十字廊（前掲報告書、『薬師寺縁起』一九六七、『薬師寺十字廊の発掘調査』二〇一四より）

図18　高松塚古墳、キトラ古墳、薬師寺本尊台座、正倉院十二支八卦背円鏡の玄武と朱雀（『キトラ古墳と壁画』二〇〇六より）

図19　真宝院、崇福寺ほか出土の無文銀銭と飛鳥池遺跡出土の富本銭（『飛鳥・藤原京展』二〇〇二より）

図20　希臘・羅馬・波斯の貨幣と神話の亀・ペガサス・ヤヌス・ヘルメスとアフラマズダの拝火壇（李鉄生『古希臘羅馬幣鑑賞』二〇〇一ほかより）

図21　ギリシア・ローマ・ササン朝ペルシアの印章（ペガサス・ヘルメス・バッカスとアリアドネなど）（拙著『アジア印章史概論』二〇〇八より）

図22　アルクルフス『巡礼記』（六七〇）に記された「ヤコブの井戸の教会平面図」等（『図説新約聖書の考古学』一九八一より）

図23　漢魏晋南北朝「胡印」（岩手県立博物館・寧楽美術館・久保惣記念美術館所蔵印）の編年と民族組織構成

図24　漢魏晋南北朝「胡印」（大谷大学所蔵印）の編年と民族組織構成

図25　漢魏晋南北朝「胡印」（中国歴史博物館・故宮博物院・上海博物館・杭州西泠印社等所蔵印）の編年と民族組織構成

図26　景教十字架形遺物の類型と編年（久米雅雄『景教印研究』二〇一三より）

図27　法隆寺蔵沈水香刻字及烙印（穂井田忠友『観古雑帖』一八四一一九二八より）

図28　法隆寺什沈水香木烙印（長谷川延年『博愛堂集古印譜』一八五七より）

図29　香木の刻銘と焼印（東野治之『Museum 四三三号』一九八七、『正倉院』一九八八より）

図30　日本吉利支丹墓碑十字の類型と編年（久米雅雄「茨木の吉利支丹遺物と歴史」・久米廣陵「京阪吉利支丹墓碑の編年と歴史的環境の復元」（『新修茨木市史』二〇〇八より）

図31　烙印十字の天地逆転と粟特文字の新解読（NYM・SYR ⇨ RYS・MYN）

図32　韓国慶州統一新羅時代の景教遺物（石製景教十字架・マリア像・十字文装飾・青銅海獣葡萄文鏡・青銅胡人像）（『崇實大学韓国基督教博物館図録』、二〇〇四より）

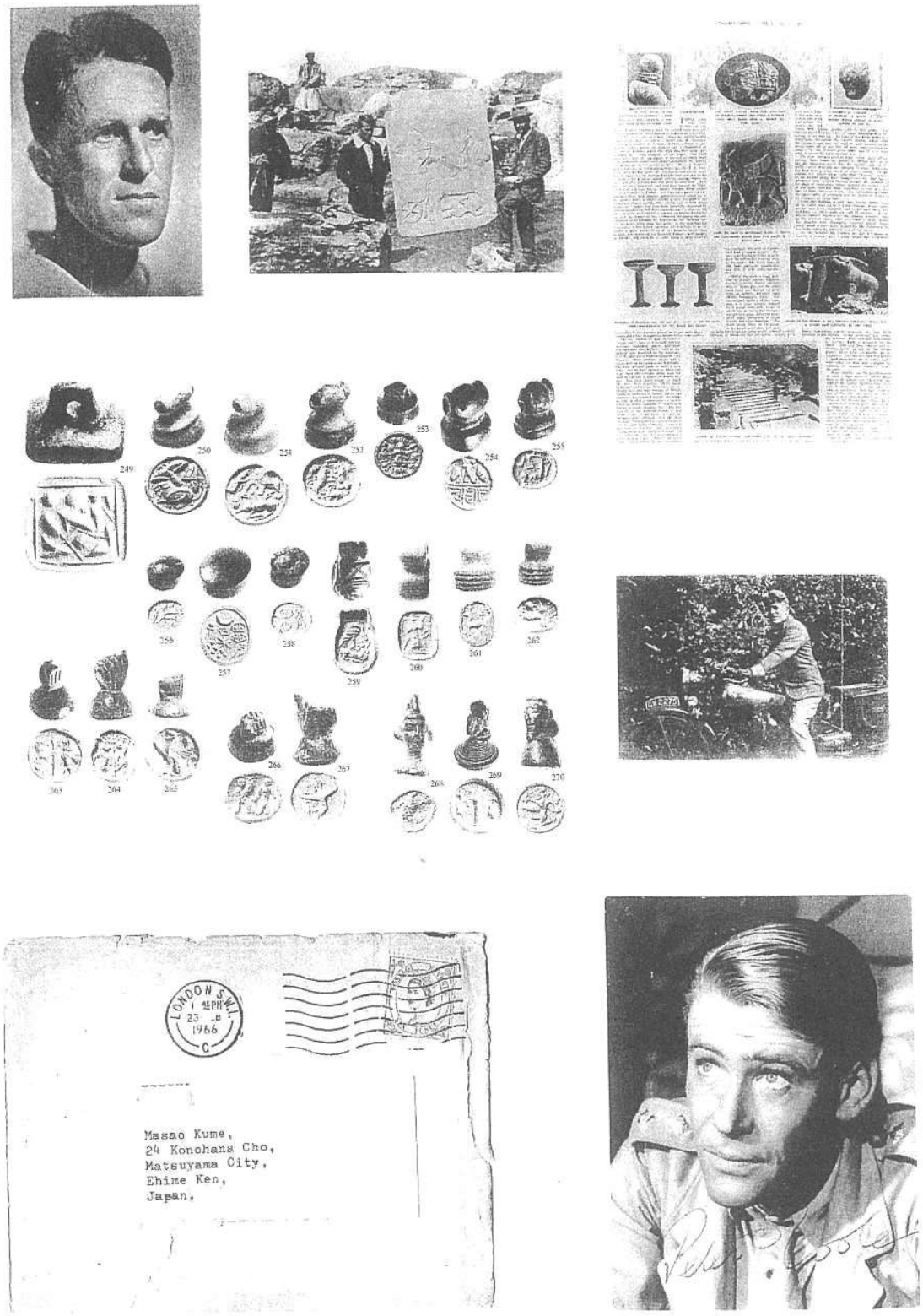
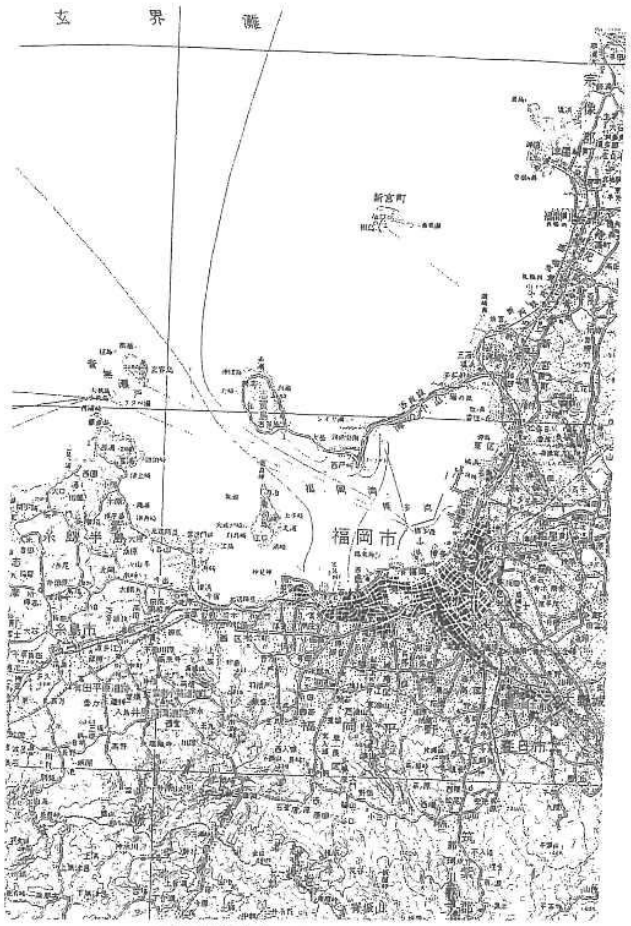
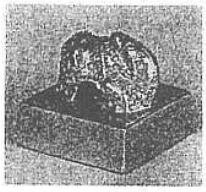


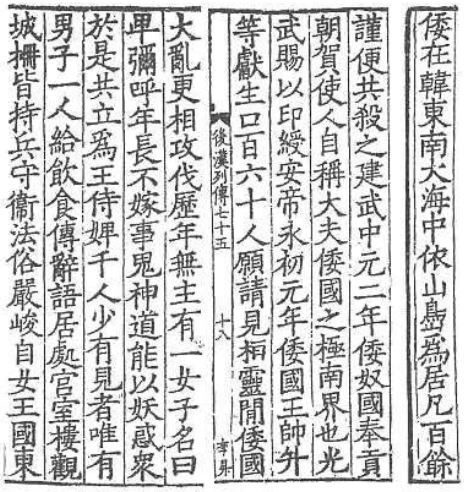
図1 「アラビアのロレンス」(T. E. Lawrence) と考古学 ―印章学へのめざめ―



金印時代前後の弥生王墓と志賀島



国宝金印「漢委奴国王」



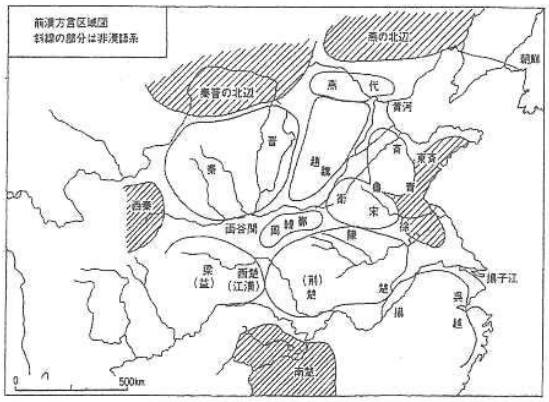
倭在韓東南大海中依山島爲居凡百餘
謹便共殺之建武中元二年倭奴國奉貢
朝賀使人自稱大夫倭國之極南界也光
武賜以印綬安帝永初元年倭國王帥升
等獻生口百六十人願請見桓靈間倭國
大亂更相攻伐歷年無主有一女子名曰
卑彌呼年長不嫁事鬼神道能以妖惑衆
於是共立爲王侍婢千人少有見者唯有
男子一人給飲食傳辭語居處宮室樓觀
城柵皆持兵守衛法俗嚴峻自女王國東

建武中元2年（57A.D）の朝貢（『後漢書』倭伝）

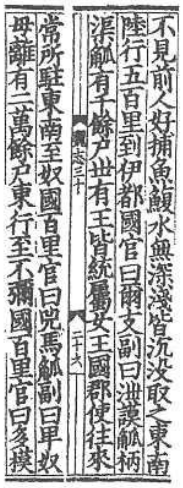
漢匈奴悪適尸逐王

新難兜騎君

明代　羅王常『秦漢印統』（1608）



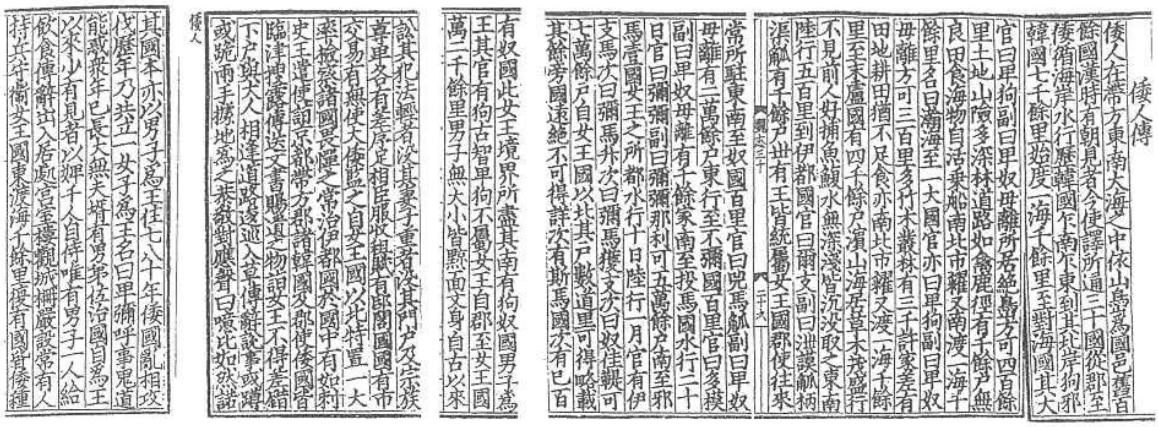
前漢時代の方言区画（林語堂「前漢区域考」による）



不見前人好捕魚鰒水無深淺皆沉沒取之東南
陸行五百里到伊都國官曰爾支副曰泄謨觚柄
渠觚有千餘戶世有王皆統屬女王國郡使往來
常所駐東南至奴國百里官曰兜馬觚副曰卑奴
母離有二萬餘戶東行至不彌國百里官曰多模

伊都国と奴国
（『魏志倭人伝』）

図２「倭の奴国王」、それとも「伊都国王」？（金印と後漢書・漢語方言・印刷・王墓・魏志倭人伝）



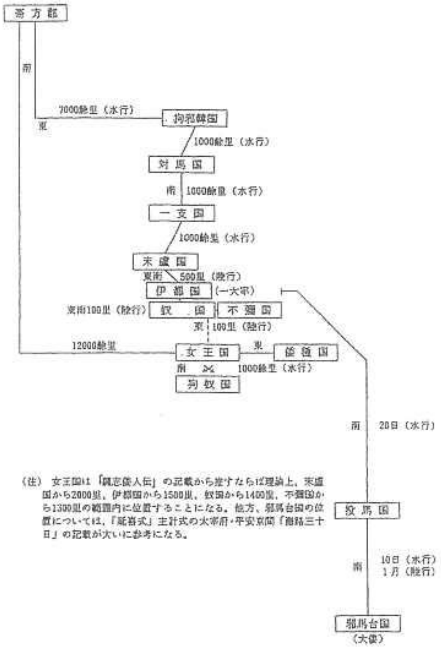
倭人傳

倭人在帶方東南大海之中依山島爲國邑舊百餘國漢時有朝見者今使譯所通三十國從郡至倭循海岸水行歷韓國乍南乍東到其北岸狗邪韓國七千餘里始度一海千餘里至對海國其大官曰卑狗副曰卑奴母離所居絶島方可四百餘里土地山險多深林道路如禽鹿徑有千餘戶無良田食海物自活乘船南北市糴又南渡一海千餘里名曰瀚海至一大國官亦曰卑狗副曰卑奴母離方可三百里多竹木叢林有三千許家差有田地耕田猶不足食亦南北市糴又渡一海千餘里至末盧國有四千餘戶濱山海居草木茂盛行不見前人好捕魚鰒水無深淺皆沉沒取之東南陸行五百里到伊都國官曰爾支副曰泄謨觚柄渠觚有千餘戶世有王皆統屬女王國郡使往來常駐東南至奴國百里官曰兕馬觚副曰卑奴母離有二萬餘戶東行至不彌國百里官曰多模副曰卑奴母離有千餘家南至投馬國水行二十日官曰彌彌副曰彌彌那利可五萬餘戶南至邪馬壹國女王之所都水行十日陸行一月官有伊支馬次曰彌馬升次曰彌馬獲支次曰奴佳鞮可七萬餘戶自女王國以北其戶數道里可得略載其餘旁國遠絶不可得詳次有斯馬國次有巳百有奴國此女王境界盡其南有狗奴國男子爲王其官有狗古智卑狗不屬女王自郡至女王國萬二千餘里男子無大小皆黥面文身自古以來

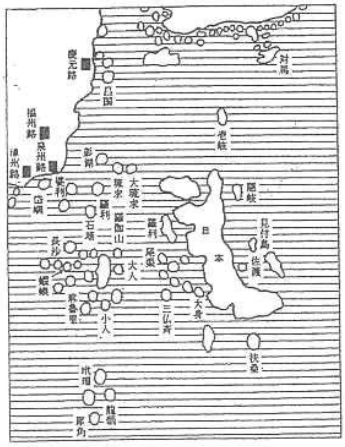
倭人

說其犯法輕者沒其妻子重者沒其門戶及宗族尊卑各有差序足相臣服收租賦有邸閣國國有市交易有無使大倭監之自女王國以北特置一大率檢察諸國畏憚之常治伊都國於國中有如刺史王遣使詣京都帶方郡諸韓國及郡使倭國皆臨津搜露傳送文書賜遺之物詣女王不得差錯下戶與大人相逢道路逡巡入草傳辭說事或蹲或跪兩手據地爲之恭敬對應聲曰噫比如然諾其國本亦以男子爲王住七八十年倭國亂相攻伐歷年乃共立一女子爲王名曰卑彌呼事鬼道能惑衆年已長大無夫壻有男弟佐治國自爲王以來少有見者以婢千人自侍唯有男子一人給飲食傳辭出入居處宮室樓觀城柵嚴設常有人持兵守衛女王國東渡海千餘里復有國皆倭種

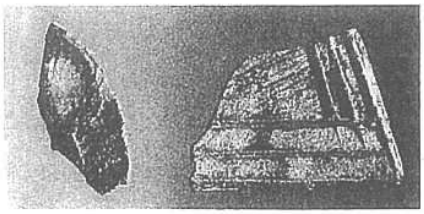
『魏志倭人伝』と国の記述



『魏志倭人伝』の倭国観（女王国と邪馬台国）
〈久米『新邪馬台国論』1986〉



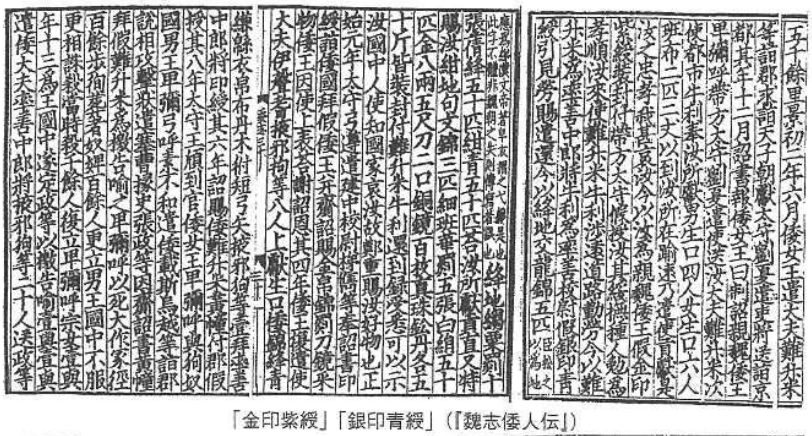
混一彊理歴代国都之図（明代）に
書かれた日本



銅鐸片　弥生時代中～後期　亀井遺跡出土

「田」（巫）字を伴う小形仿製鏡　径5.4cm
弥生時代後期　亀井遺跡出土〈久米 同書 1986〉

図3 「新邪馬台国論」―女王国・邪馬台国への道と二王朝並立（主都・副都）論―



「金印紫綬」「銀印青綬」（『魏志倭人伝』）

「重訳入貢」（『晋書』倭人伝）

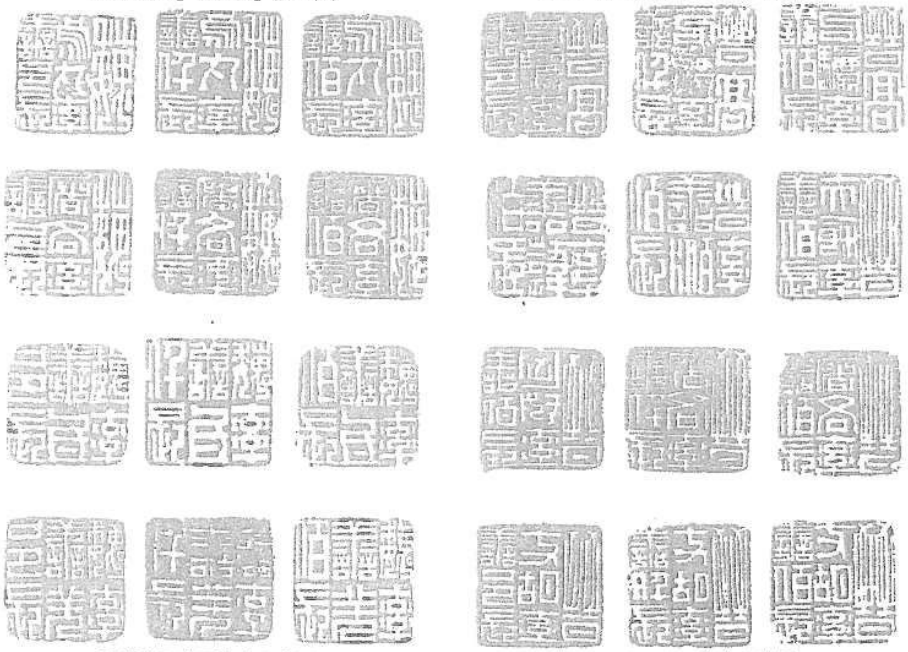
「並受中国爵命」（『梁書』倭伝）

「親魏倭王」

「親魏倭王」

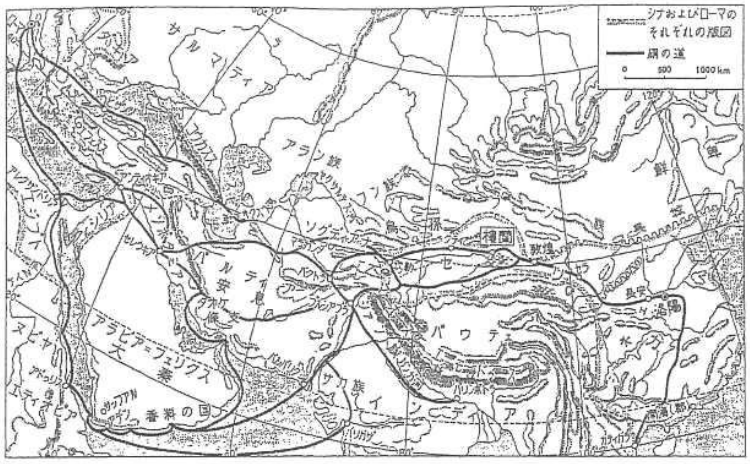
「魏率善倭中郎將」

「魏率善倭校尉」
（日本篆刻家協会
出田塘陵氏 刻）



魏頒給兄弟民族官印諸例　　晋頒給兄弟民族官印諸例

図４　金印「親魏倭王」印と魏・晋の印章



「シルクロード」中国からローマへの絹の道（アルベルト・ヘルマン『楼蘭』1931より）

ヘディン

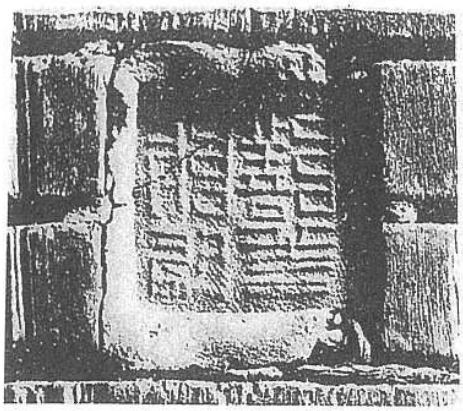
スタイン

スウェン・ヘディン発見
「楼蘭」出土の封検

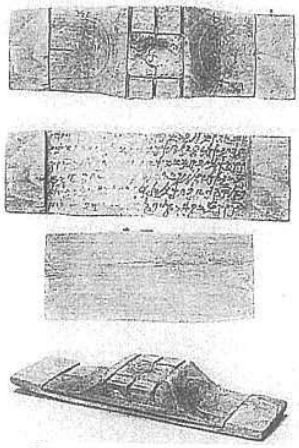
オーレル・スタイン発見
「敦煌」出土の封検

大谷光瑞（龍谷大学1989より）

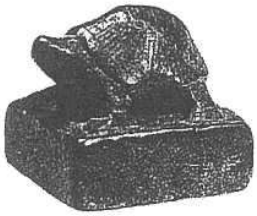
図5 「シルクロード」とスウェン・ヘディン、オーレル・スタイン、大谷光瑞および「封検」の発見



「鄯善都尉」封泥（尼雅遺跡出土『幻の楼蘭・黒水城』1980より）



「日中共同尼雅遺跡学術調査隊」発見の
「カローシュティー木簡Ⅰ」（1996）



「インド象を描いた印章」（クチャ出土）
（康殷『古図形璽印彙』續集1991より）

「文徳左千人」亀鈕銅印（王人聡・
葉其峯『秦漢魏晋南北朝官印研究』1990より）

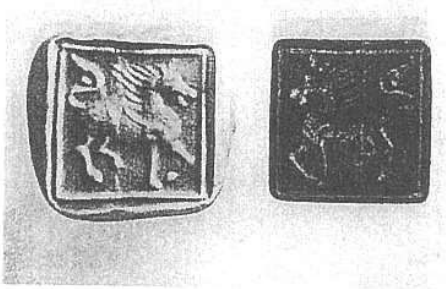
「敦徳歩廣曲候」亀鈕銅印（王人聡・
葉其峯『秦漢魏晋南北朝官印研究』1990より）

東京国立博物館図版目録

大谷探検隊将来品篇

ILLUSTRATED CATALOGUES OF TOKYO NATIONAL MUSEUM
CENTRAL ASIAN OBJECTS BROUGHT BACK BY THE OTANI MISSION

『東京国立博物館図版目録
大谷探検隊将来品篇』（1971）



「大谷探検隊　天馬を描いた印章（ヨトカン出土）」
（『東京国立博物館図版目録』より）

図６　「鄯善都尉」封泥、「文徳左千人」・「敦徳歩廣曲候」銅印、インド象、ペガサスの肖形印章

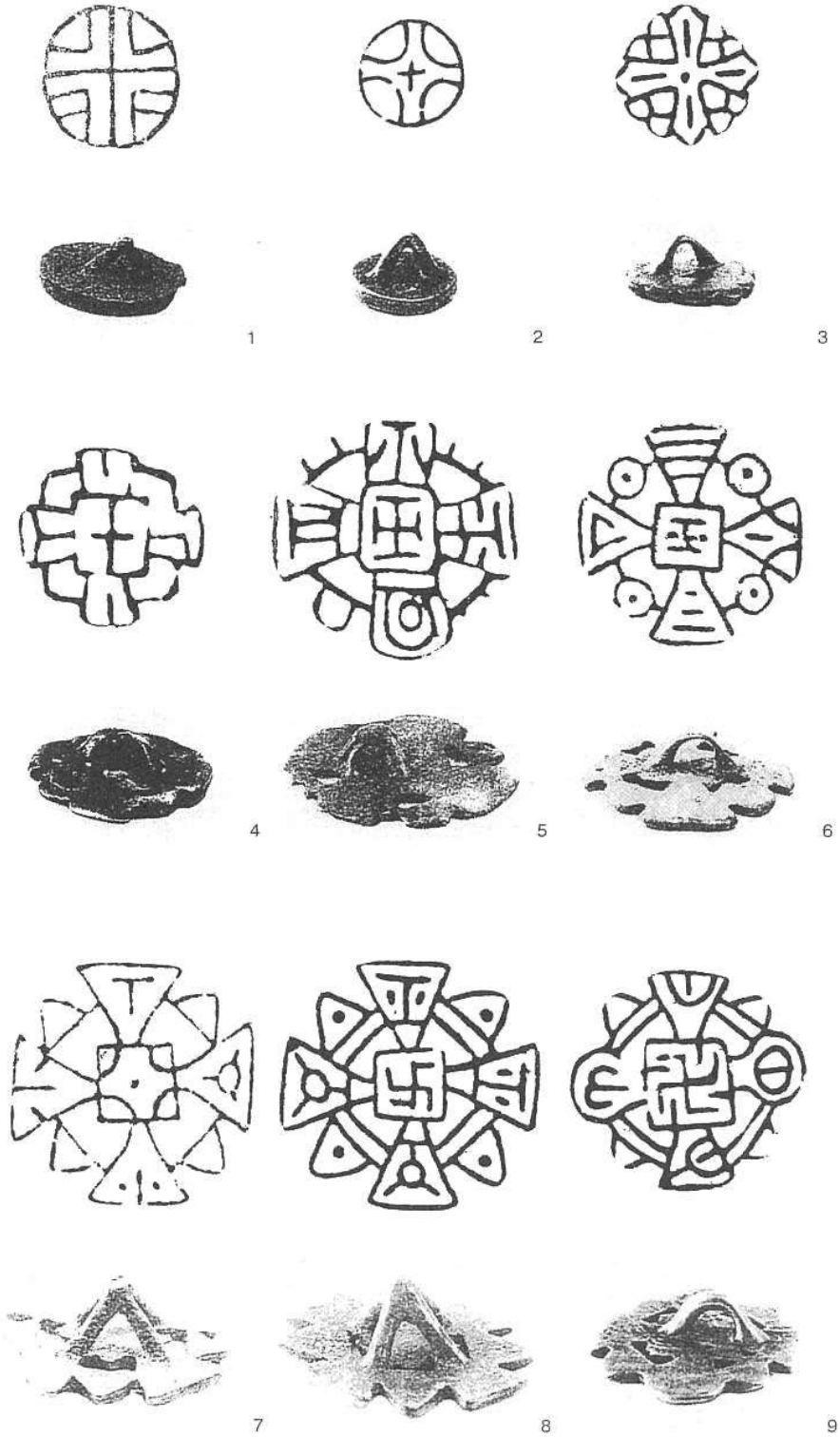
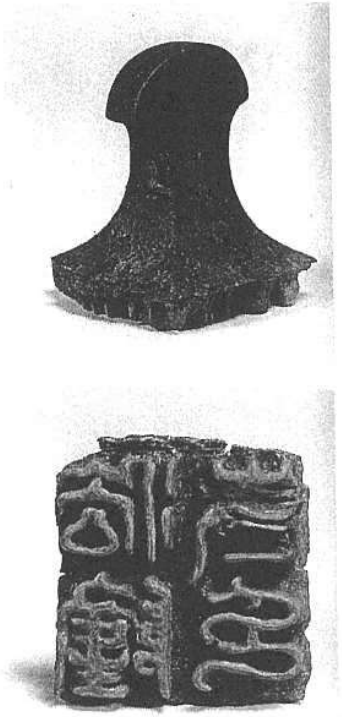
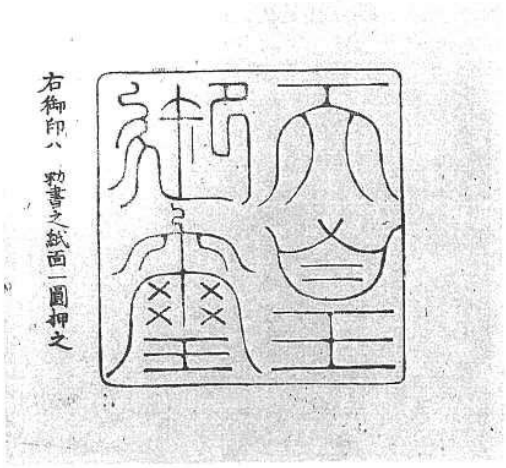


図７　銅製十字架形遺物・景教印の類型と編年




右御印ハ 勅書之紙面一圓押之

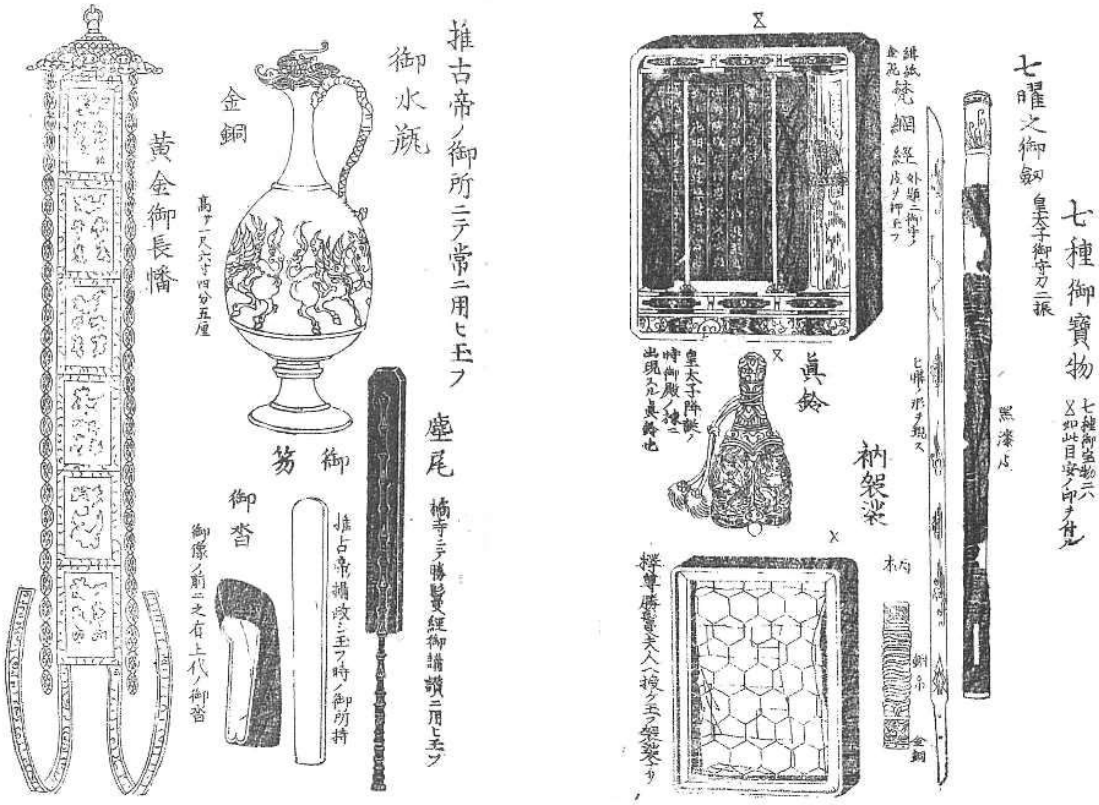
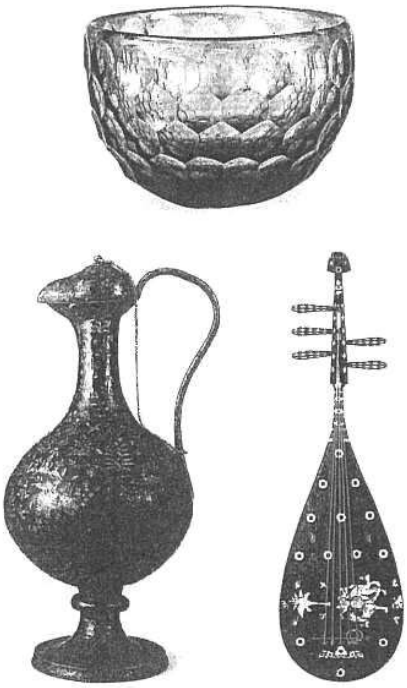
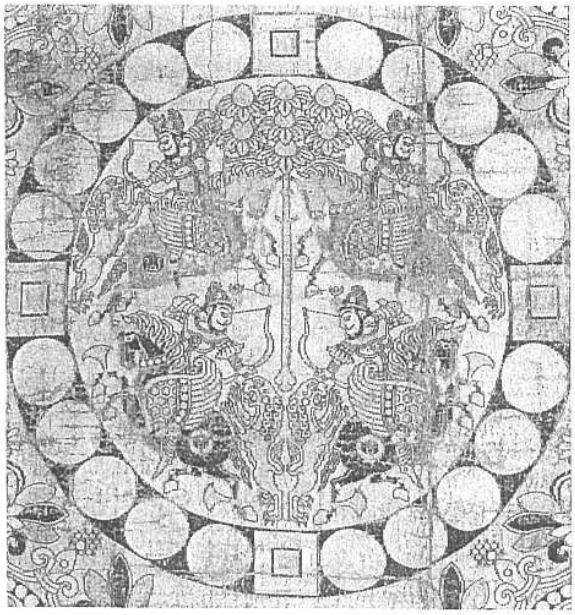

七種御寶物
七種御寶物ニハ
X印此目安ノ印ナリ
七曜之御劍
皇太子御守刀ニ振
黑漆皮
七曜ノ形ヲ現ス
木内
銅ヲ
金銅
納袈裟
X
X
X
皇太子降誕ノ時御殿ノ棟ニ出現ス是鈴也
眞鈴
緋紙
金泥
紺
經
外題ニ御字ノ
皮ヲ押ス
推古帝ノ御所ニテ常ニ用ヒ玉フ
御水瓶
金銅
高サ一尺六寸四分五厘
黃金御長幡
御
笏
御
沓
推古帝補改ヒ玉フ時ノ御所持
御像ノ前ニ之有上代ノ御沓
虛尾
補寺ニテ勝鬘經御講讃ニ用ヒ玉フ

図 8



日本奈良正仓院的西域波斯系文物
（白琉璃碗、漆胡瓶、螺钿紫檀五弦琵琶）

◉龍首水瓶



◉四騎獅子狩文錦

图 9

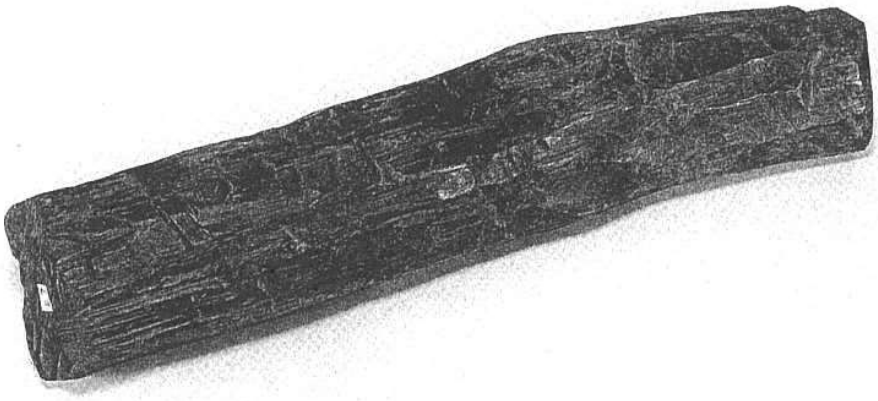
◎伎楽面　醉胡王

◎伎楽面　醉胡從

◎伎楽面　醉師王

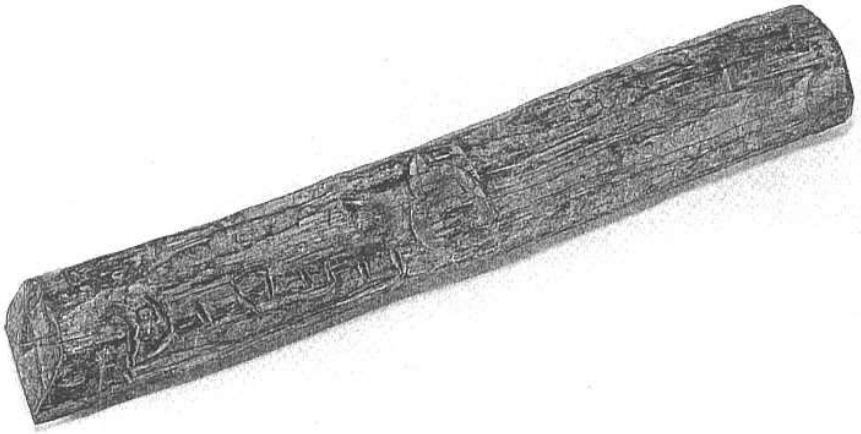
◎伎楽面　醉師從

図 10



◎栴檀香　一材

白檀材
長六六・四　最大径一三・〇
白鳳～奈良時代　七～八世紀
東京国立博物館（N一一一）
法隆寺献納宝物
墨書「甘三斤」「仏」「更定廿四斤五□（年ヵ）三月
四日仏」「天応」「年二月三日更定廿四□（斤ヵ）□」
（裏ヵ）□「延暦廿年定廿五斤」「□」
刻書「b w h t w [d] y」（原文パフラヴィー文字）
焼印「s y r n y m」（原文ソグド文字）



◎白檀香　一材

白檀材
長六〇・二　最大径九・〇
白鳳～奈良時代　七～八世紀
東京国立博物館（N一一二）
法隆寺献納宝物
墨書「塔」「寺斤十斤先□（勅ヵ）」「更定重十二斤八
両字在年三月四日」「天応□（に）年定十□□」「白
檀　延暦二十年定十三斤□□（小斤ヵ）」「葛四斤九
両」（この銘、木口にあり）
刻書「b w h t w [d] y」（原文パフラヴィー文字）
焼印「s y r n y m」（原文ソグド文字）

図 11

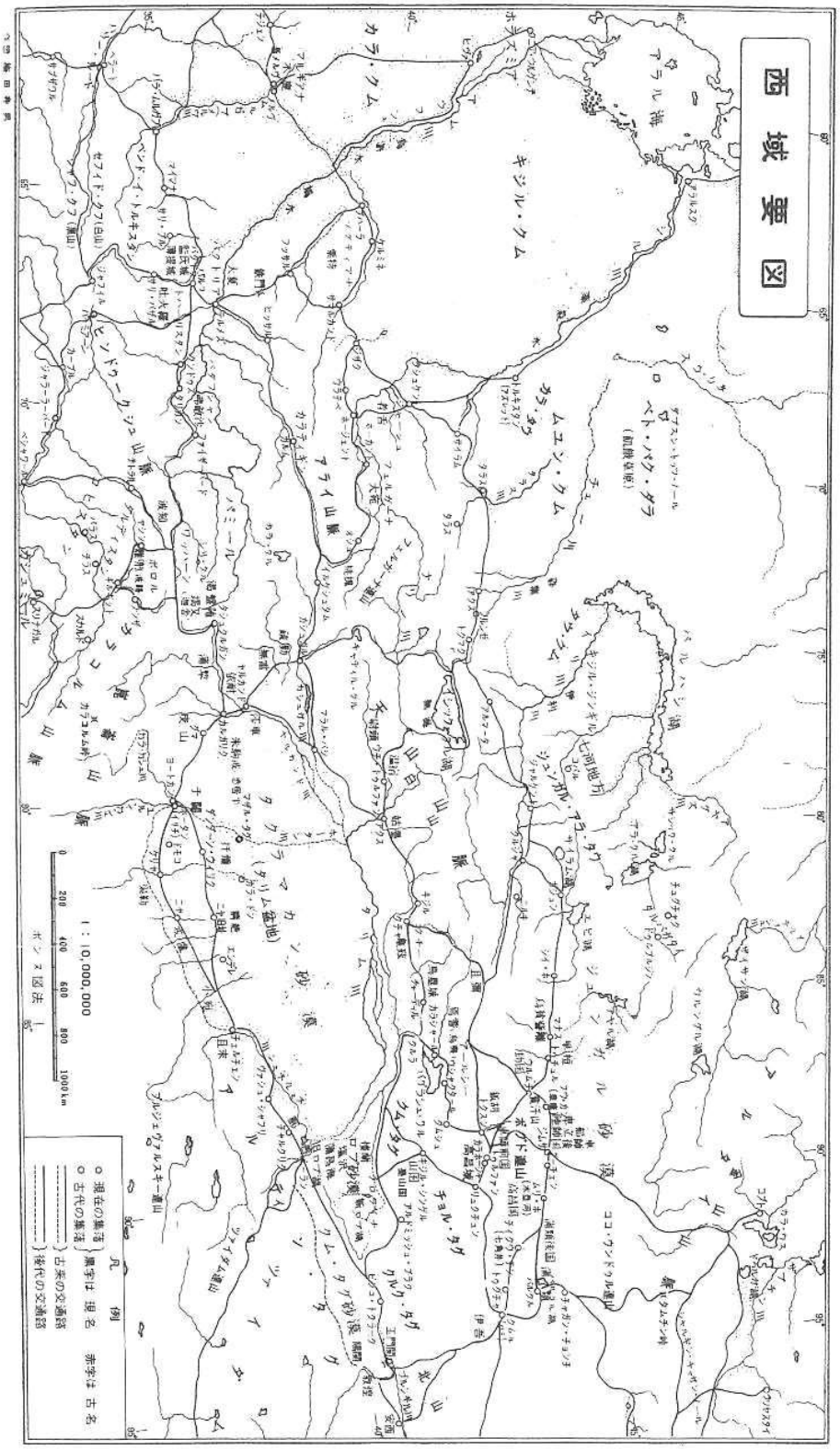
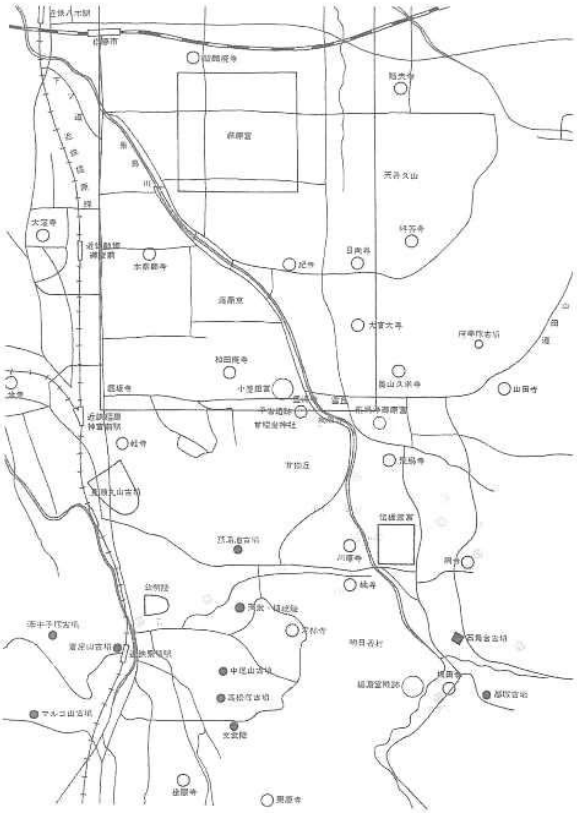
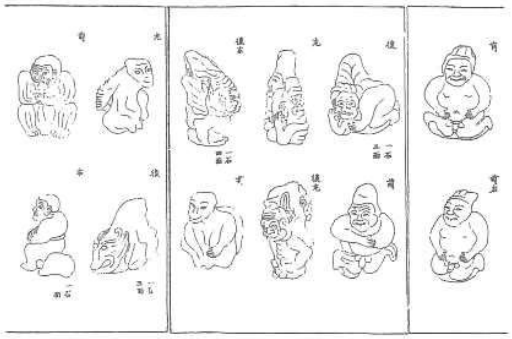
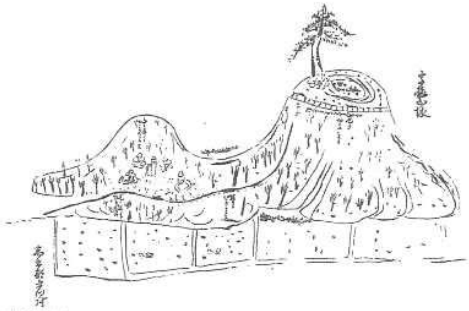


図 12



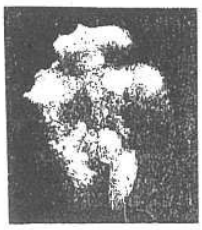


猿石（藤田傳三郎古址説）



欽明天皇陵と猿石（梅山塚古墳）

亀石・鬼の厠・遺（大和名所図会）



益田池碑（亀石上様）

益田池碑（西国一十三所名所図会）

益田池碑（大和名所図会）

遺骨石（西国一十三所名所図会）

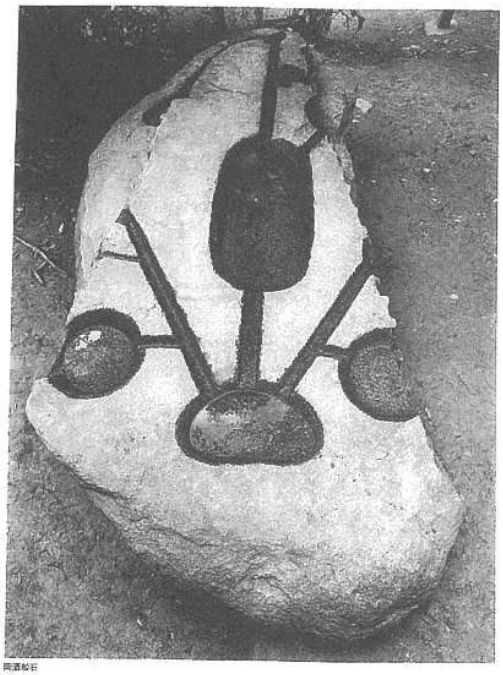
図 13

石人像

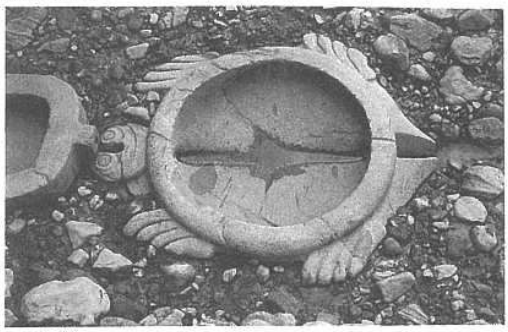
復原

須佐山石

復原（いずれも崇真文化財研究所提供）



岡酒船石



酒船石遺跡亀形石槽

酒船石遺跡　亀形石槽

図 14

吉備線王墓猿石　女と山王権現

人面石

高取の猿石

吉備線王墓猿石　婆と男

二面石

上房の立石

川郷の立石

ミロク石

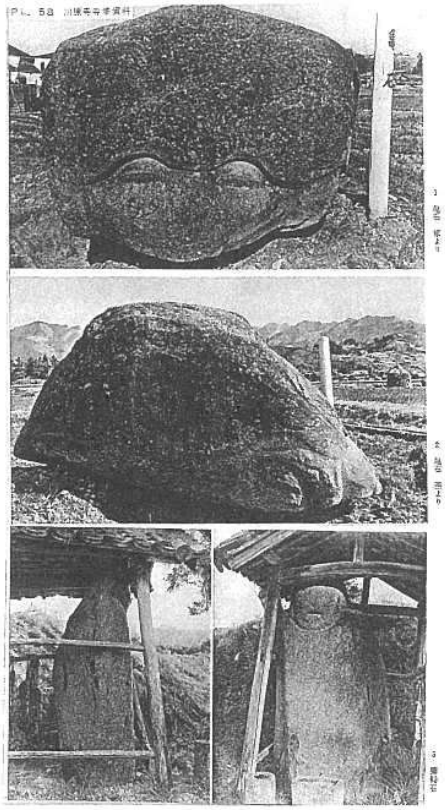
出水遺船石（1916年）

マラ石

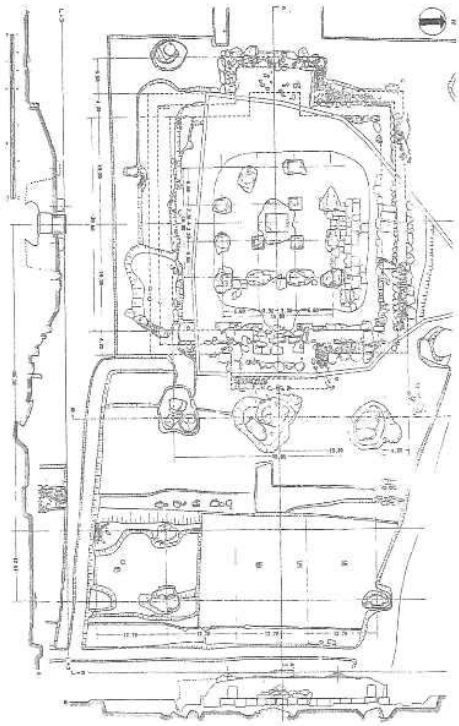
鬼の立石

出水遺船石（1916年）

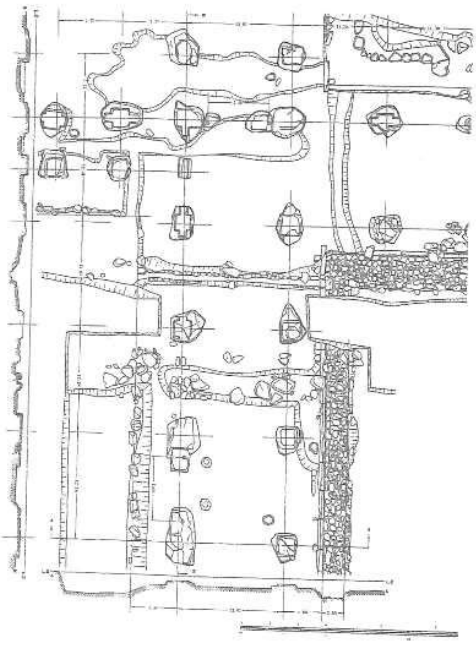
図 15



PLAN 5 塔及び東回廊実測図



PLAN 10 回廊西北隅附近実測図



PLAN 13 西僧房実測図

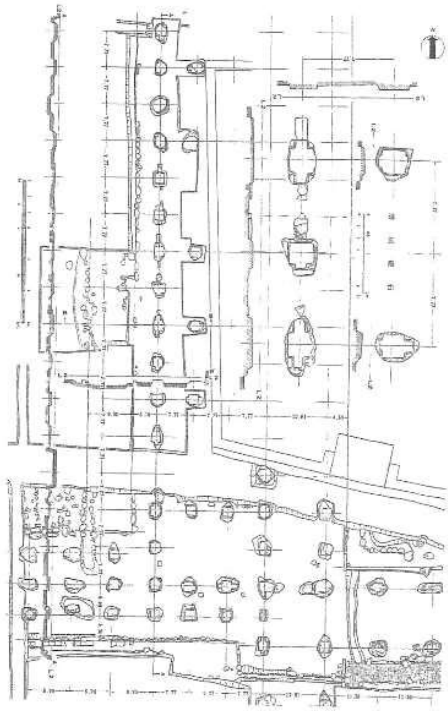
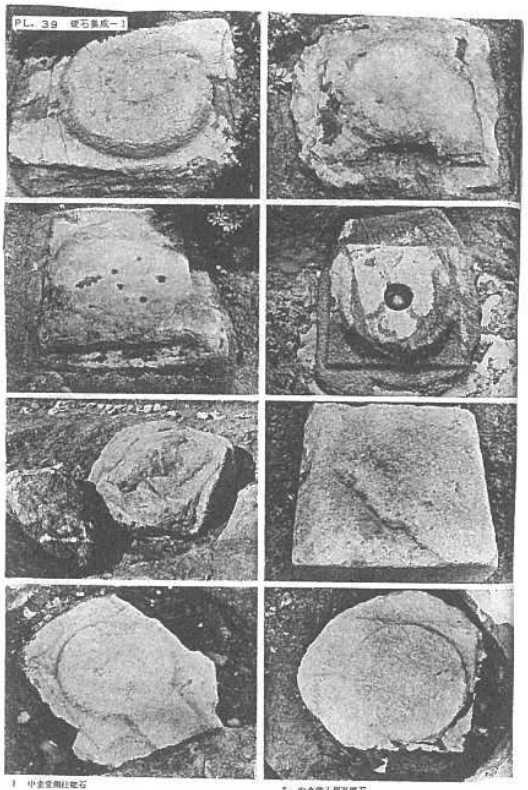
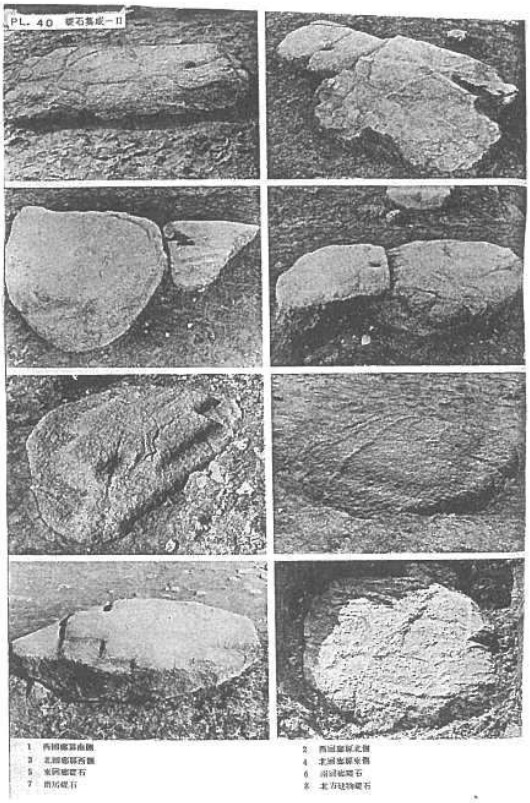


図 16



1 中金堂側柱礎石
3 中金堂入側礎石
6 塔須弥壇礎石
7 山門礎石
2 中金堂入側礎石
4 中金堂床式に使用していた礎石
5 薬師寺東塔礎石
8 南門礎石

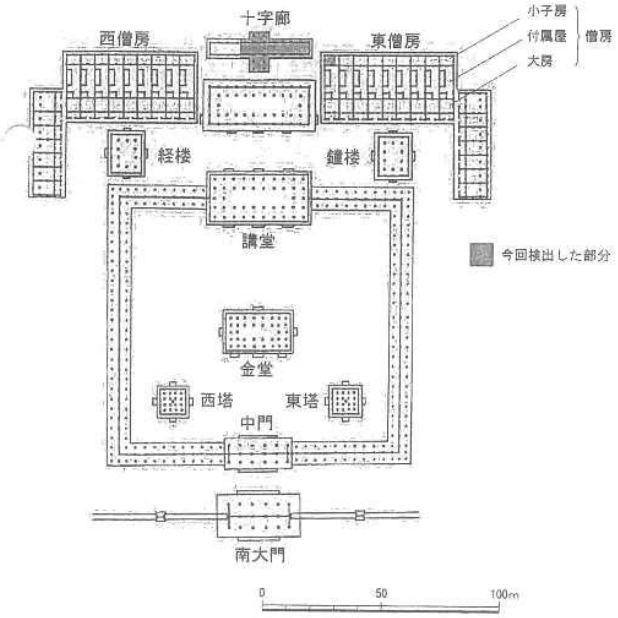


1 西回廊算盤玉
3 北回廊算盤玉
5 東回廊礎石
7 南方建物礎石
2 西回廊礎石
4 北回廊礎石
6 南回廊礎石
8 北方建物礎石

一十字廊一宇東西十四丈一尺南北五丈
六尺高九尺二寸ニ食殿
右天禄四年二月廿七日焼巳而別當増祐
以寛弘二年造立但南北如本

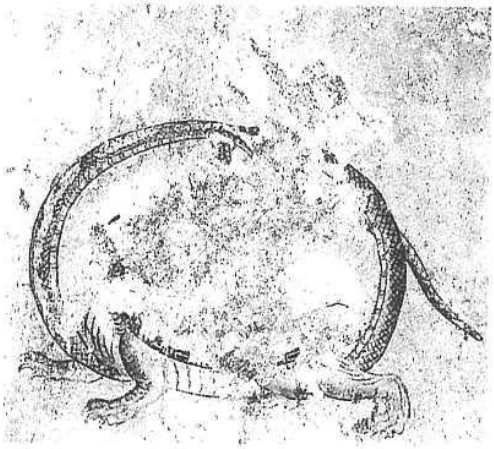
一、十字の廊一宇　東西十四丈一尺、南北五丈六尺、高さ九尺二寸、食殿と云々。
右は天禄四年二月廿七日に焼亡了。而して別当増祐、寛弘二年を以て造立なり。但し南北は本の如し。

（薬師寺本『薬師寺縁起』より）
天禄四年：九七三年
寛弘二年：一〇〇五年

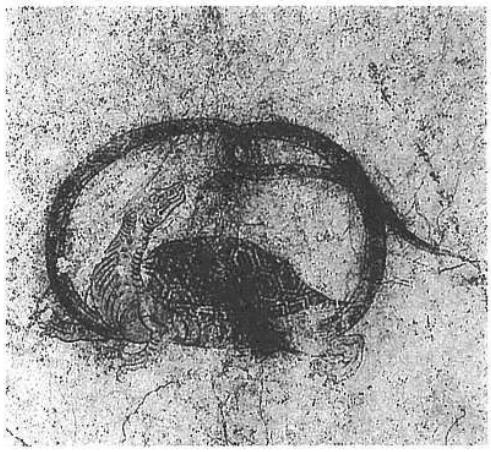


薬師寺伽藍配置図

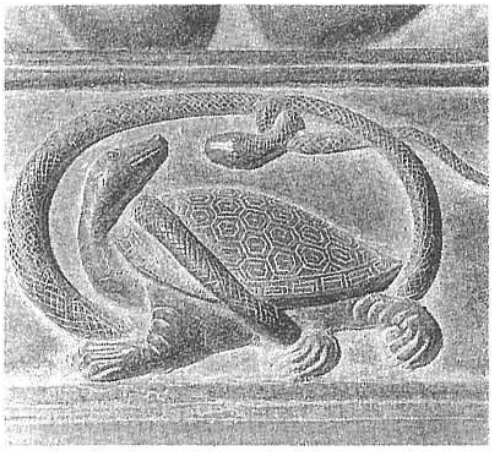
図 17



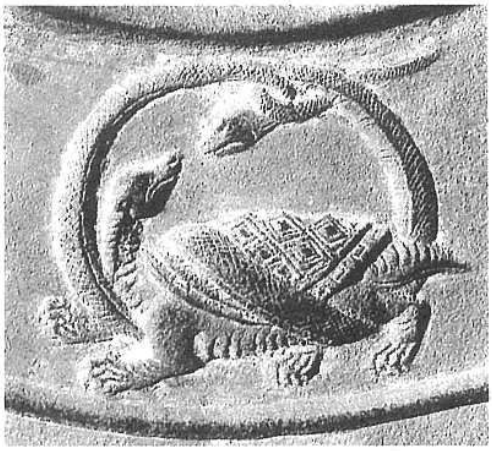
高松塚古墳



キトラ古墳玄武



薬師寺本尊台座



正倉院十二支八卦背円鏡

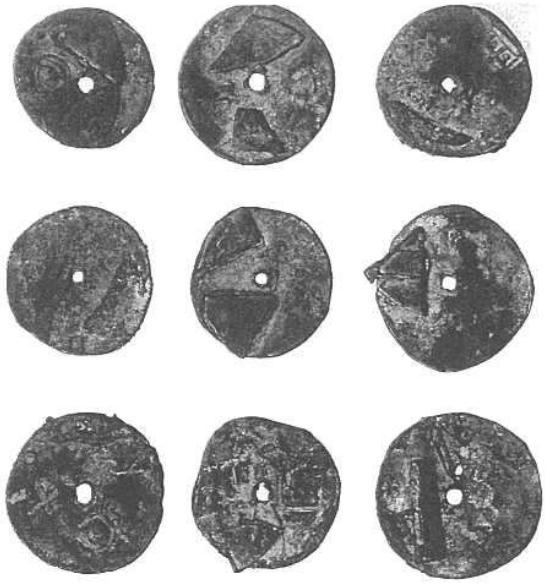
薬師寺本尊台座

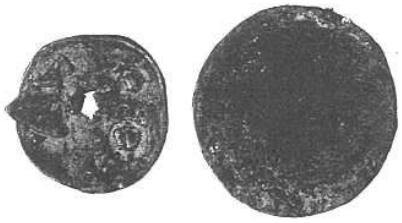
図 18

86-1 無文銀銭
大阪府真宝院出土
国立歴史民俗博物館

86-2 無文銀銭
奈良県横領町出土
国立歴史民俗博物館

86 各地出土の無文銀銭





86-3 国宝　無文銀銭　滋賀県崇福寺跡出土　近江神宮

87 各地出土の富本銭

87-1 富本銭
奈良県　平城京
東三坊大路東側溝出土

87-2 富本銭
奈良県　平城京
右京八条一坊十四坪出土

87-3 富本銭
奈良県　藤原京
右京一条二坊出土

87-4 富本銭
奈良県　藤原京
左京北三条六坊出土
橿井市教育委員会

87-5 富本銭
大阪府　細工谷遺跡出土
大阪市文化財協会
大阪市指定文化財

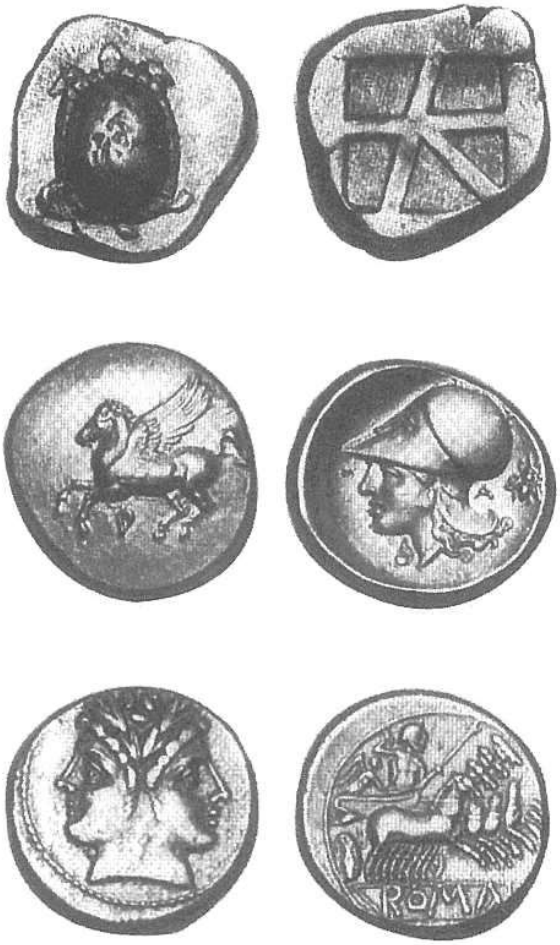
87-6 富本銭
長野県　武陵地古墳出土
高森町教育委員会
長野県宝

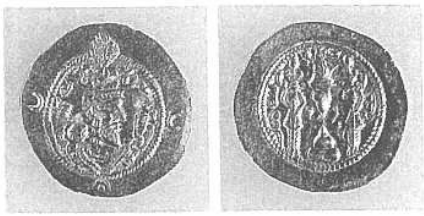
87-7 富本銭
長野県　座光寺地区出土
飯田市教育委員会
長野県宝

87-8 富本銭
群馬県　上栗須遺跡出土
群馬県埋蔵文化財調査事業団

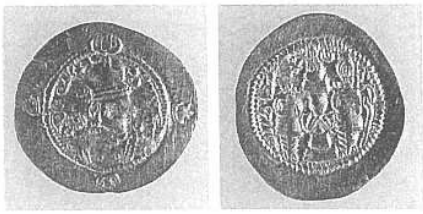
88-1 富本銭　飛鳥池遺跡出土

図 19





フスラウ１世　銀　１ドラクマ
Khusraw I (A.D. 531-579). Silver. 1 Drakhma.
D. 3.0cm　Wt. 4.1g



オフルマズド４世　銀　１ドラクマ
Ohrmazd IV (A.D. 579-590). Silver. 1 Drakhma.
D. 3.2cm　Wt. 3.8g

フスラウ２世　銀　１ドラクマ
Khusraw II (A.D. 591-628). Silver. 1 Drakhma.
D. 3.1cm　Wt. 4.1g

アルダフシール３世　銀　１ドラクマ
Ardakhshir III (A.D. 628-630). Silver. 1 Drakhma.
D. 3.3cm　Wt. 3.5g

Hermes with winged cap and *kerykeion*

Pegasus Representation of the winged horse on a piece of woven material (6th century)

Janus on a Roman copper coin; as usual he is represented with two faces, i.e., with both right and left profiles

図 20

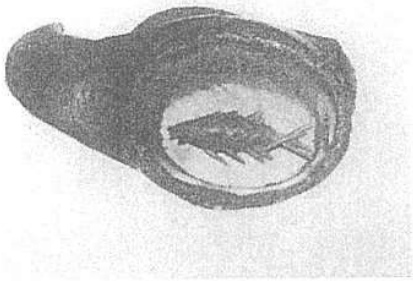
1

5

2

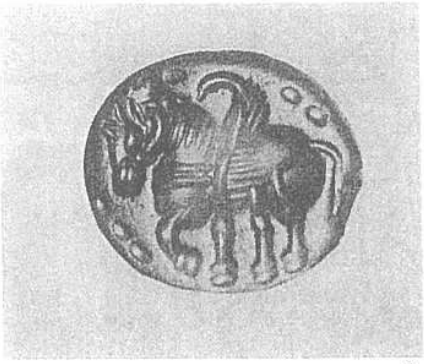
6

3



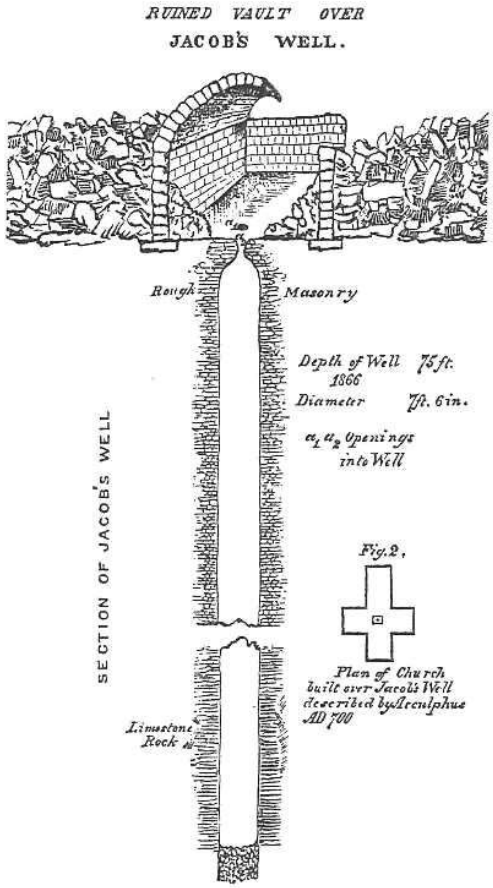
7

4

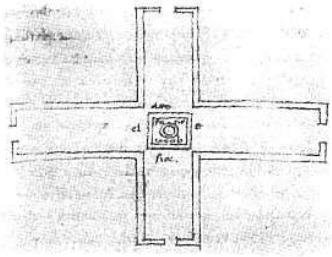


8

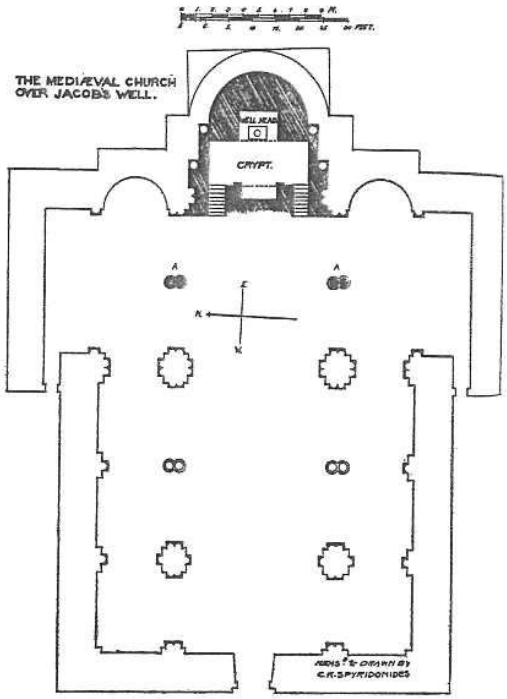
図21　ギリシア・ローマ・ササン朝ペルシアの印章



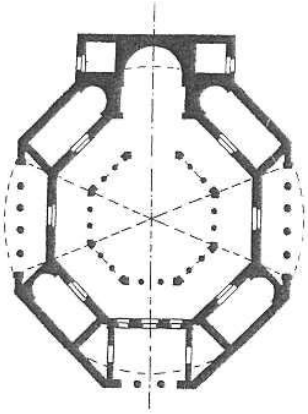
ヤコブの井戸の縦断面 (The Survey of Western Palestine, Samaria. p. 175より)



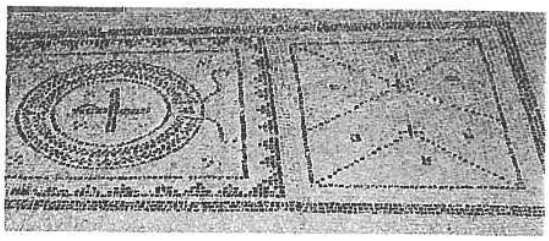
アルクルフスの描いたヤコブの井戸の教会平面図



十字軍時代のヤコブの井戸の教会平面図

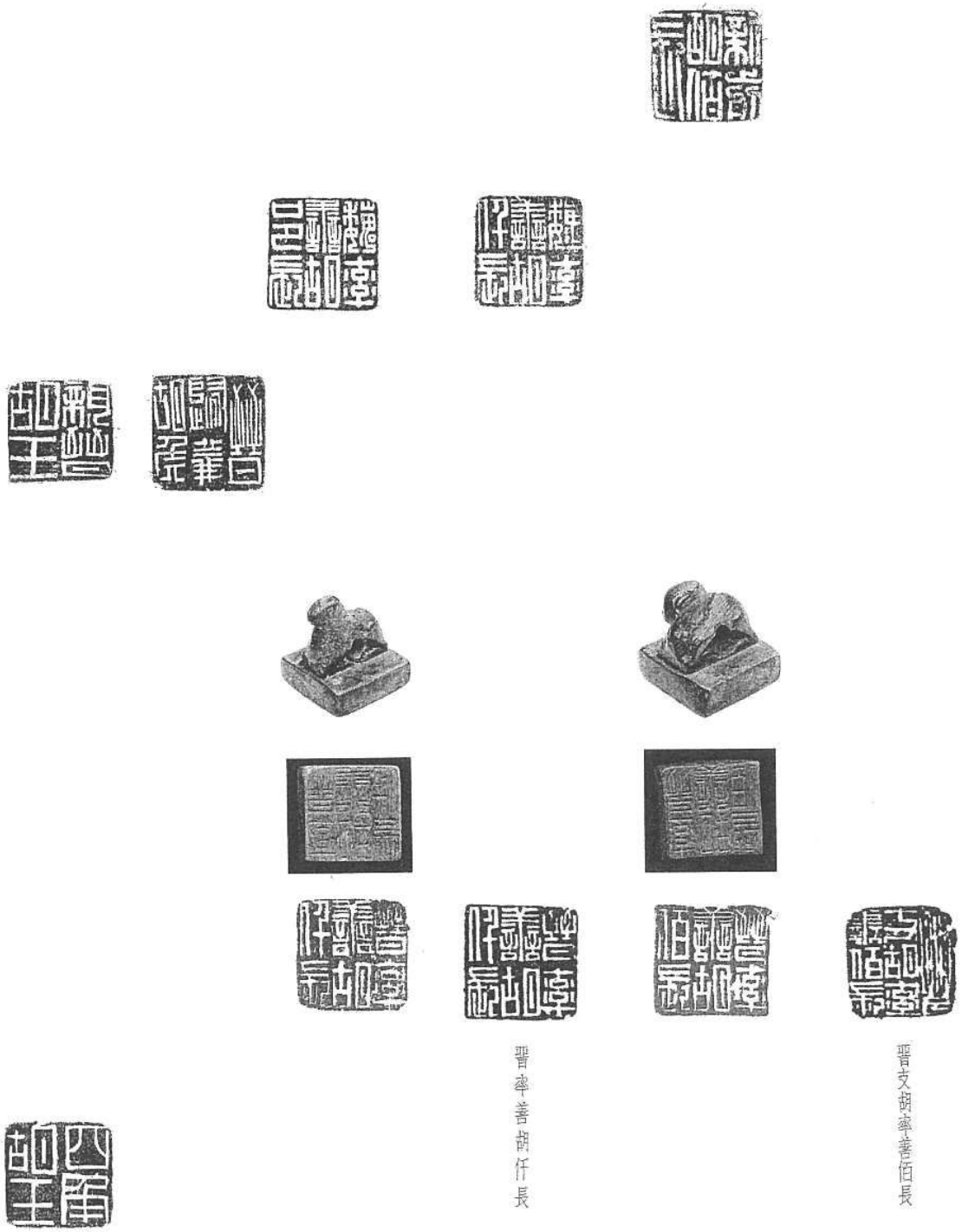


テオトコス教会オクタゴンの平面図



6 ビザンティン時代のモザイク床(ラテン告知教会)

図 22



晉率善胡仟長　銅印羊鈕

晉率善胡佰長　銅印駱鈕

図 23

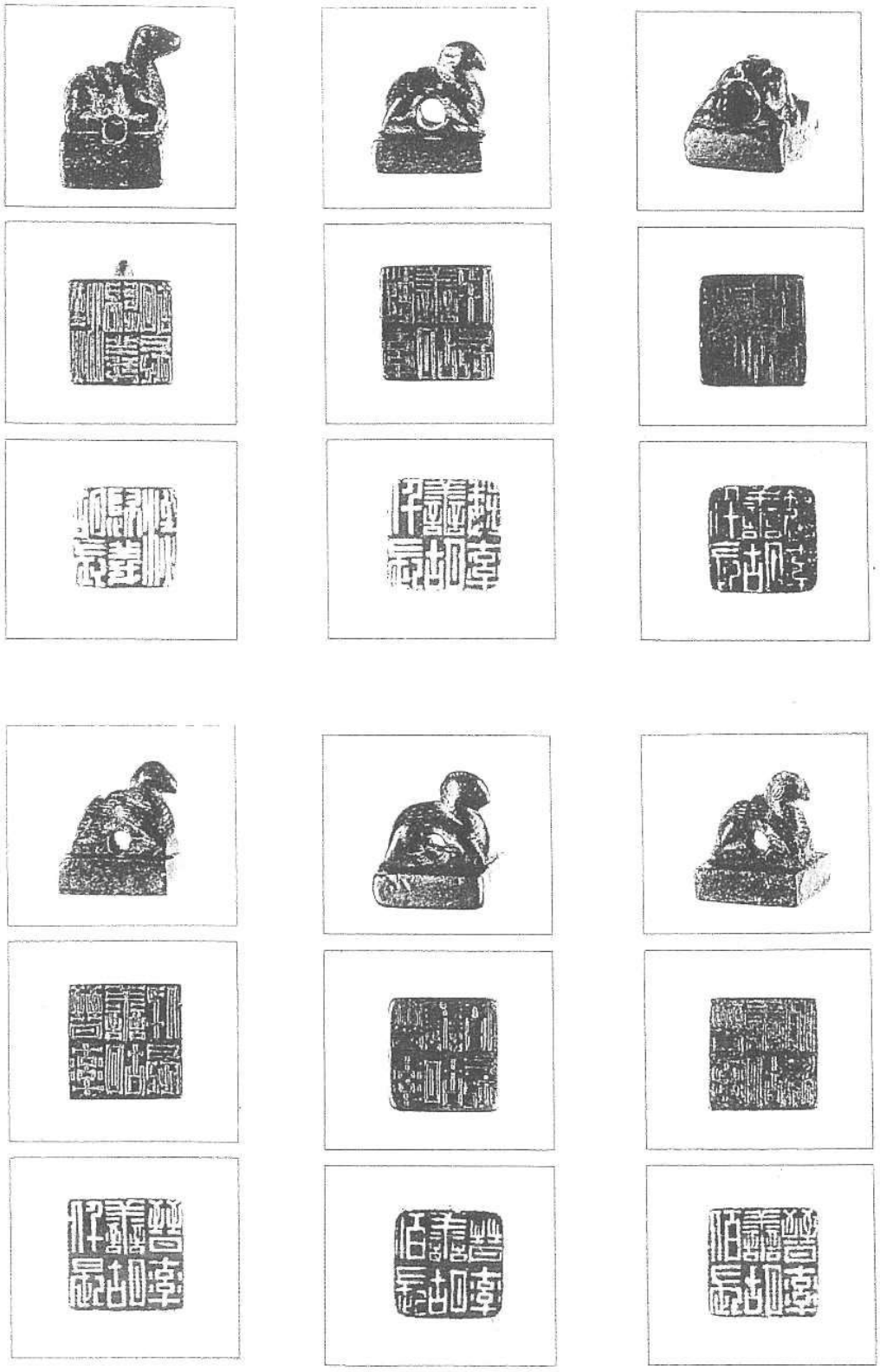


図 24

新前胡佰長　瓦紐　日
佰長釋見上

新前胡小長　瓦紐　故
史記大宛傳：大夏城邑置小長。

新難兜騎君　瓦紐　史
漢書西域傳有難兜國。考西域傳，于闐、莎車、疏勒、烏孫諸國均有左、右騎君。

魏率善胡佰長　駝紐　杭西
釋見上

魏率善胡仟長　駝紐　故
釋見上

魏率善胡邑長　駝紐　故
三國志魏志梁習傳：習領并州刺史，降服境内胡狄，其後，大軍出征，分請以爲勇力吏兵。

漢率善胡長　駝紐　故
釋見上

漢破虜胡長　駝紐　待
後漢書西羌傳：元初二年，鹿參將羌、胡兵七千余人北擊零昌。此爲漢給胡族官印。

漢歸義胡長　駝紐　史
釋見上

晉率善胡佰長　駝紐　故
釋見上

晉率善胡仟長　駝紐　上
釋見上

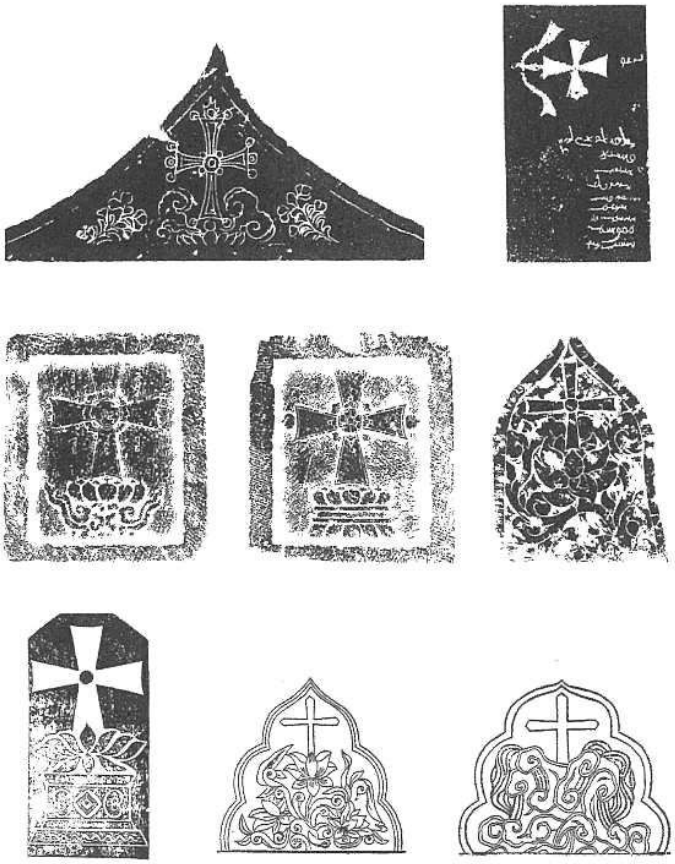
晉率善胡邑長　駝紐　故
釋見上

晉歸義胡侯　鎏金　駝紐　上
釋見上

晉歸義胡王　駝紐　故
釋見上

親晉胡王　駝紐　歷
釋見上

図 25



陕西省、河北省、江苏省、福建省等处发现的景教十字架形遗物
（据[日]佐伯好郎著《景教研究》，1935年）

旧属俄罗斯塞米利切恩斯克州出土的景教墓石十字的类型与编年（笔者据[日]佐伯好郎著《景教研究》加以分类整理）

图 26

法隆寺藏沈水香刻字及烙印

長二尺許 徑三寸許 有墨書曰
□定重十二斤八兩字五年三月 四日
天應二年□□□□
延暦廿年□□□□十三斤 寺斤十斤
天保七年三月 縱觀之次以今秤
量之重七百八十匁

長同前墨書曰更定廿四斤□□□
天應二年二月二日更定廿四斤
延暦廿年□□□定廿五斤
材端徑四寸許 書曰菊四斤九兩
今秤重貫五百匁

二材斤量蓋並以延暦爲正其斤則今秤六十匁即雜令所謂小者而大斤一百八十匁之三分一也太寶撰令已來至延喜十四年之物實檢皆然刻字必是古韓字烙印必是韓商之所用並未得讀解墨書中今□□者剥落難辨也

沈水香名常ニ沈香ト呼フ其略稱ノミ本草綱目李時珍ノ說ニ木之心節置水則沈故名沈水トスル是也推古天皇紀三年四月沈水漂著於淡路嶋其大一圍嶋人不知沈水以交新焼於竈其烟氣遠薫則異以獻之ト見エタル ヲ聖德太子傳暦ニ太子奏曰是沈水香也此木名旃檀香木生天竺國南海岸中略即勅命刻造觀音菩薩安吉野比蘓寺時ニ故光ト書タルハ欽明天皇紀十四年五月朔河内國言泉郡茅渟海中有梵音中略樟木浮海玲瓏遂取而獻天皇命造佛像今吉野寺故光樟像也トアルヲ混一シテ此說ヲ釀セル欽三百年前既香家ノ香譜ノ歌ニ六十一種ノ名香ハ法隆寺東大寺吉野龍田西大寺ト見ニ志野流香書ト云ニ名香ノ第一ヲ太子トス一名法隆寺ト注シ又此香木ハ聖德太子是ヲ天竺ニ得テ此寺第一ノ重寶トス故ニ太子ト名ケト云ルナト皆推古紀ニ本附テ蛇足ヲ長セシモノ也今此木ハ韓字及烙印アリ天竺モ亡非ル事知ベシ按ニ天智天皇十年十月新羅國ヨリ貢獻スルモノ欽紀云九月天皇震疾不豫十月新羅進調是月天皇遣使奉沈水香焝檀香及諸珍財於法興寺佛此文合セ考フベキ也今現存文字アルモノ二材文字ナキ桙木ノ如キモノ一材又小片三五材アリ法隆寺古今目錄抄顯真得業陶書草稿ニ寛元二年入道殿下道家公實物御覽ノ目錄中沈水香ニ長二尺計ト見エタリ小片ハ略キテ計ヘサレニヤ○守五年ニハ天平寶守五年ノ量定トス事也東大寺三倉ノ古書中法師道鏡手輪ニ守七年六月廿日ト記セリ相徵スベキナリ○韓字ノ事ハ後ニ畧記ス烙印字ハ未考○廿五斤ノ木ノ端ニ記セル葛四斤九兩ハ今秤ニ百七十三匁七分五厘也此端記一木ニ在テ他セシ按ニ九四ヲ東ヲ百斤トシ其東葛ノ重サノ東中一木ノ端ニ記セル欽三倉古書中寶守六年正月甲加山作所橘守金弓ノ鮮文ニ楓樹貳拾伍材溝下雇夫單卅六人六箇日役 功五百卅文 人別十五文 葛取雇夫功卅文 人別十文ト見エタリ溝下ハ六日ノ役葛取ハ一時ノ役ナハ取ハ採ノ義ニテ野山ノ葛ヲ採リニ遣ルナシ同年比造近江石山寺司ノ用途文書ニモ黑葛幾斤トスル事所々見エタリ○橘ノ字恐クハ橘ノ異字ナベシ姓氏錄左京蕃別ノ新羅ノ中ニ橘守ト云氏アリテ天日梓命之後也トアルハ橘ノ縁ニテ疑フベシ

図 27

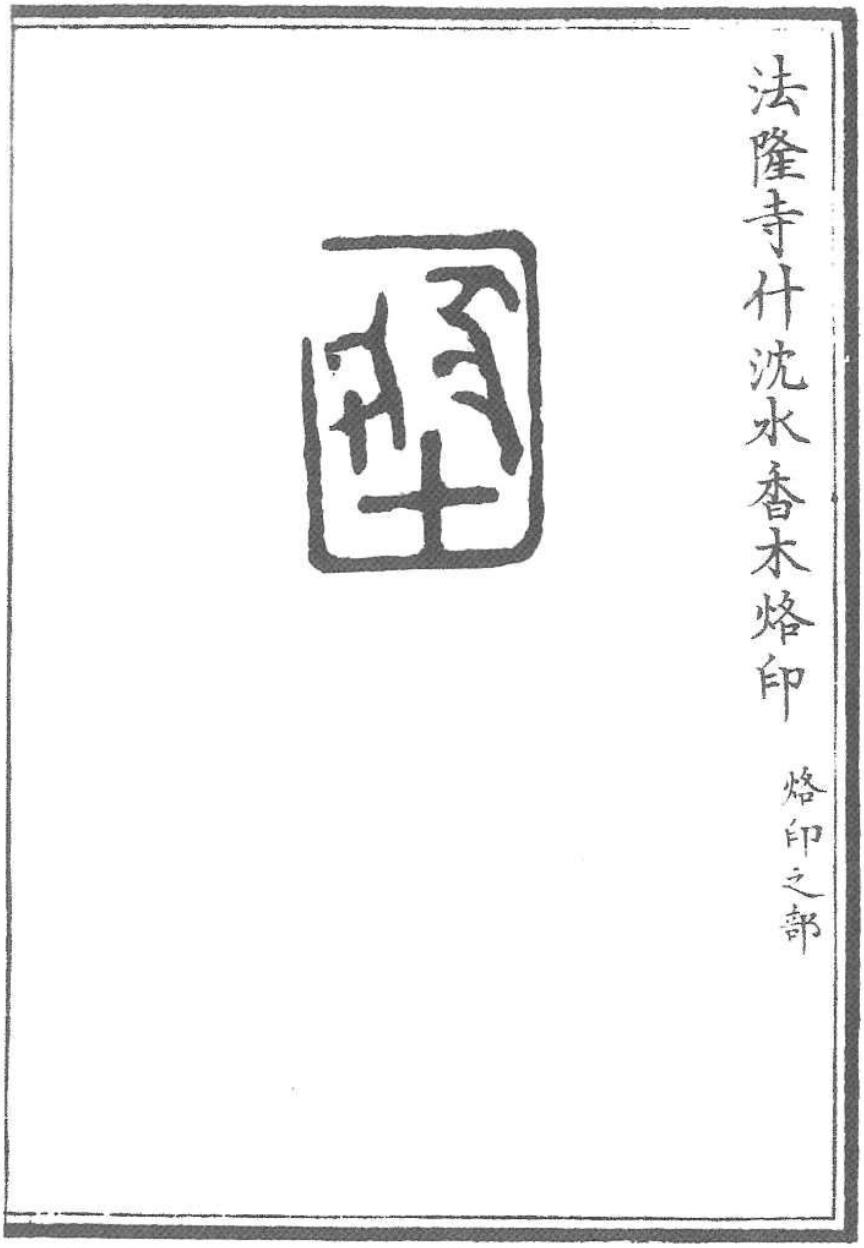
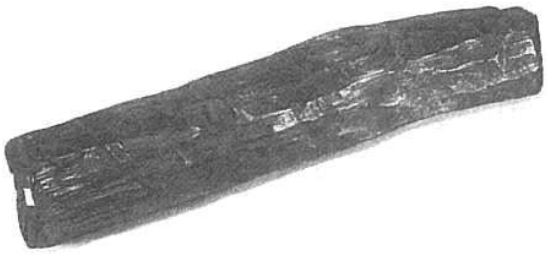


図 28

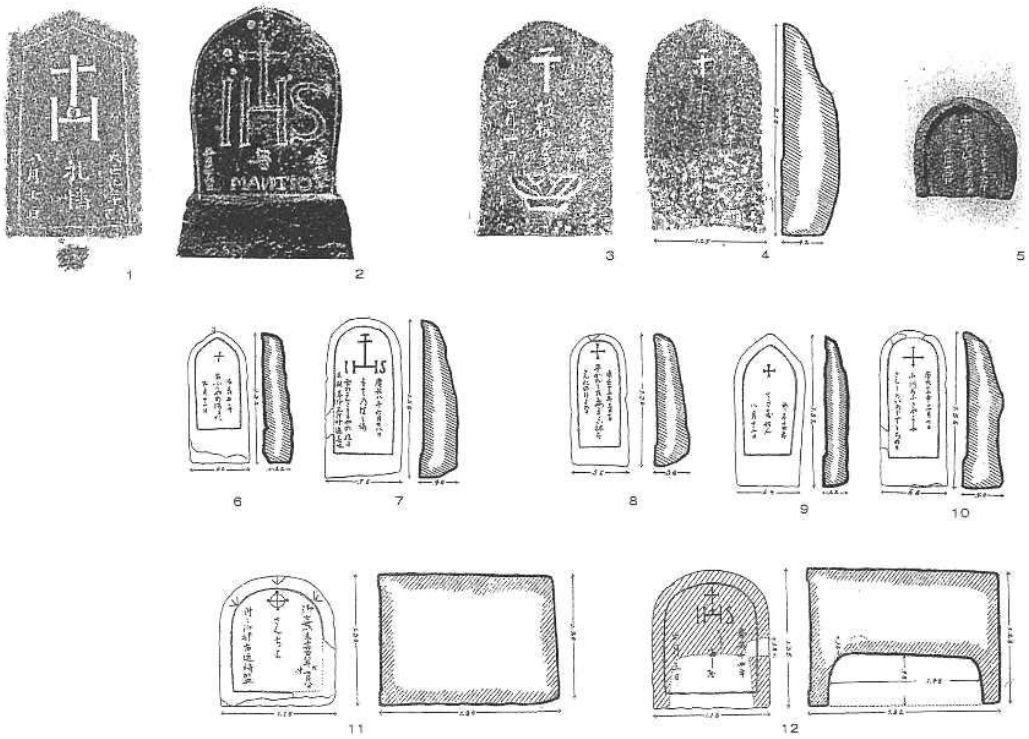


白檀の香木(東京国立博物館蔵，法 112 号)

香木の刻銘(東京国立博物館蔵，法 113 号)

香木の焼印(法 112 号)　下の図は，もう一つの香木(法113 号)にある焼印と合わせ，復原した印影

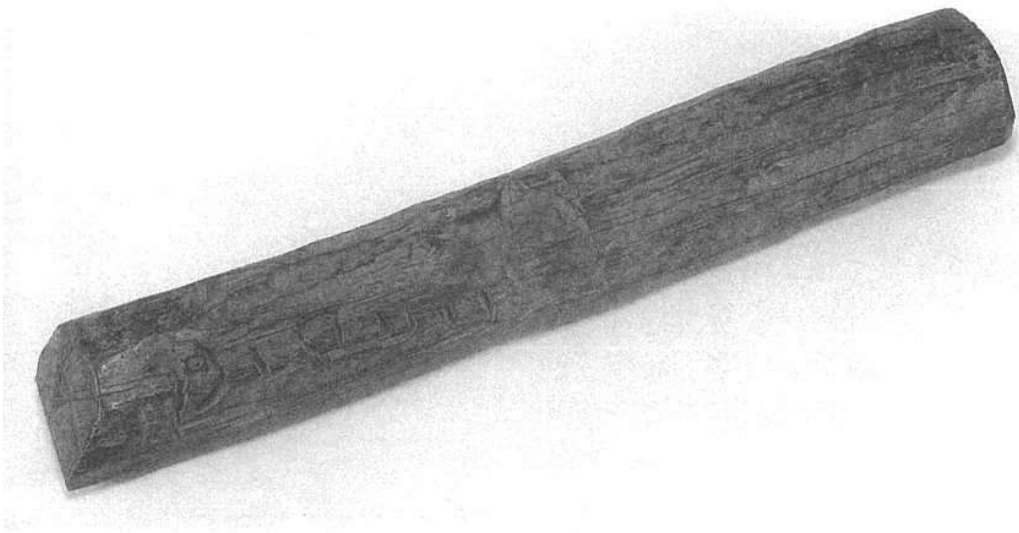
図 29



「京阪キリシタン墓碑編年表」(久米廣陵論文「京阪キリシタン墓碑の編年と歴史的環境の復元」『新修茨木市史』 第九巻　2008年より)

「京都キリシタン墓碑」編年追補拓影資料ほか

図 30



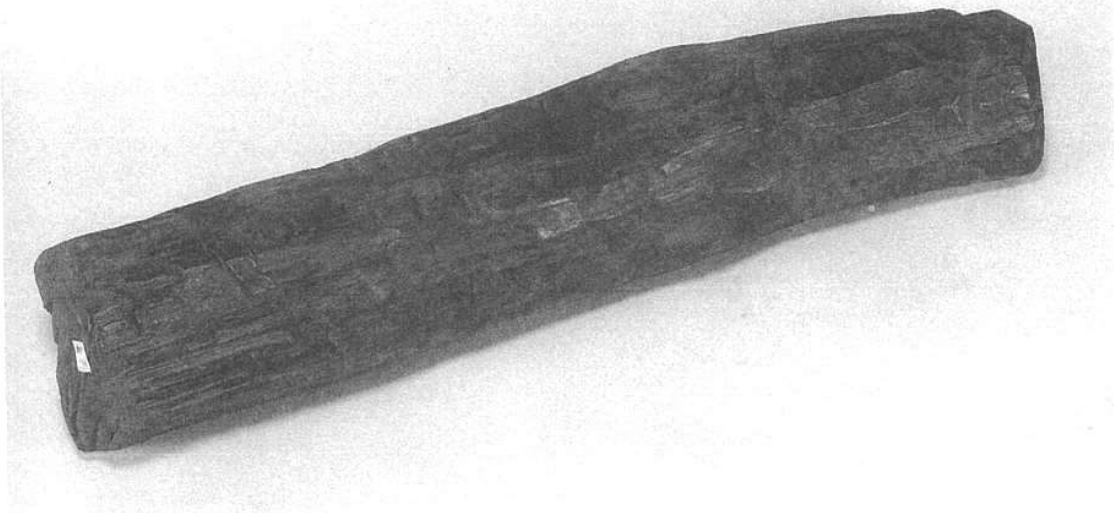
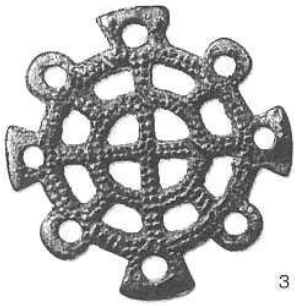


図 31

1

2



3

4

5

6

図 32

平成二十七年三月三十一日発行

第十五回松本清張研究奨励事業研究報告書

編集・発行　北九州市立松本清張記念館
北九州市小倉北区城内二番三号
電話　〇九三―五八二―二七六一

編集・印刷　株式会社西部毎日広告社

松本清張研究奨励事業

第18回

募　集　要　項

一、趣　旨　時代を見つめ続けた松本清張の文学を研究することは、今後の時代の進むべき方向性と私たちの生きていく指針を見出すことにもつながります。このような視点から、清張の作品や人物像についての研究活動を推進し、歴史や社会の事象の深層を追求する精神を継承していくため、松本清張夫人ナヲ様のご厚意により創設しました。

二、対　象　ジャンルを問わず、松本清張の作品や人物像を研究する活動や、松本清張の精神を継承する創造的かつ斬新な活動（調査、研究等）で、これから行おうとするもの。年齢、性別、国籍は問いません。ただし、未発表に限ります。個人または団体も可。

三、内　容　入選者(団体)に一三〇万円を上限とする研究奨励金を支給します。金額は企画内容を検討して決定します。

四、応募規定　今後取り組みたい調査・研究テーマ等の内容が具体的にわかる企画書・予算書・参考資料など（様式は自由、ただし日本語）を、平成二十八年三月三十一日までに応募してください。

五、選　考　松本清張記念館内の選考委員会により選考します。

六、発　表　審査終了後、審査結果を直接通知します(六月末頃)。なお、入選者には開館記念日(八月四日)に、北九州市で贈呈式を行います。

七、その他　採用された企画は翌年の六月末日までに実施成果を報告していただきます。また、成果品である研究論文、報告書等は記念館が刊行予定の研究誌に掲載することがあります。成果品にかかる著作権等諸権利は、北九州市に帰属します。

八、応募先　〒八〇三―〇八一三　北九州市小倉北区城内二番三号
TEL〇九三(五八二)二七六一　FAX〇九三(五六二)二三〇三

北九州市立　松本清張記念館